

2024 年度 ボランティアセンター 年間活動報告書



フェリス女学院大学

2024 年度ボランティアセンター年間活動報告書 目次

はじめに

センター長 知足 章宏 1

ボランティアセンターの目的と事業

1．中期計画（21-25PLAN）	2
2．2024 年度の活動をふりかえって	3
3．ボランティア活動科目履修	4
4．その他	5

活動報告

1．活動一覧	6
2．センターの利用状況	8
1）利用学生数	
2）情報提供～メール登録システム	
3）学外からのボランティア情報	
3．活動紹介	10
1）新入生向けボランティア説明会	
2）ボランティア養成講座	
3）大学祭	
4）使用済み切手・書き損じはがきの収集と寄付	
5）ペットボトルキャップの回収	
6）寿町バザーへの支援	
4．学生活動支援	24
1）ボランティア活動補助費の支給	

学生ボランティアグループの活動

1．登録学生スタッフ	25
2．演奏ボランティアチーム	26
1）コミュニティだんだん	
2）四季の会	
3）めぐみ幼稚園クリスマス祝会	
3．アンネのバラチーム	29
1）ポプリ作りワークショップ	
2）アンネのバラ記念礼拝	
3）アンネのバラ花壇看板デザインコンテスト	

NPO インターンシッププログラム	35
国際機関実務体験プログラム	39
学習支援ボランティア	40
学生による活動報告	
【NPO インターンシッププログラム】	45
NPO インターンに参加して	国際交流学科 2 年
障害者自立生活センターIL・NEXT でのインターンシップ	音楽研究科 1 年
活動報告書	国際交流学科 3 年
国際協力 NGO「Act for Child」でのインターンシップ活動を終えて	国際交流学科 1 年
NPO 法人アークシップでのインターン	音楽芸術学科 2 年
【ボランティア活動補助費】	59
千葉市こどものまち CBT (Chiba Town)	音楽芸術学科 1 年
第 70 回マレーシアワークキャンプ	英語英米文学科 4 年
フェリス生のボランティアに関する意識調査	65
ボランティアセンター資料	72
ボランティアセンター規程	
ボランティアセンター運営委員会規程	
ボランティアセンター運営方針	
2024 年度を振り返って	コーディネーター 上條直美 77

表紙写真・表紙裏写真 アンネのバラ

はじめに

ボランティアセンター長 知足 章宏

2023、2024 年度にボランティアセンター長を務めました知足と申します。2024 年度も学生たちが活発なボランティア活動を行うことができました。日頃から学生たちの活動にご理解、ご協力頂いている皆様に心より感謝を申し上げます。

COVID-19 禍の影響は、現在では何の影響もないようにみえますが、社会、学生たちの行動を大きく変えました。オンライン化、SNS といった閉鎖的な環境下でより普遍的かつ依存的となったコミュニケーションツールや社会の変容は、情報過多と現実との乖離とともにコスパ、タイパといった感覚を意識の根底に根付かせ、より個人主義、効率志向に向かっているように思います。

一方、そのような社会情勢の変化の中で、本学には、積極的に大学の外に出てボランティアを行い、海外で学ぶ学生たちが多くいます。何件ものボランティアを掛け持ち、多くの人々と接し対話を重ね、インターンシップに取り組み、海外実習にも参加して国境を越え交流を深める学生たちの姿が確かにあります。これは、とても大きな可能性と希望だと思っています。今後の発展に向けて様々な課題もありますが、このような学生たちをサポートする本センターの役割と意義はとても大きいと改めて思います。日頃、本センター、学生たちをサポートして頂いている皆様に心より感謝を申し上げます。

本報告書には、2024 年度における当センターの活動内容、学生たちのボランティア活動報告などが記されております。活動報告では、学生たちが実際にボランティア活動を行った理由、経験したこと、課題・成果など、今日におけるボランティア活動の意義を再考するうえでも重要な点が示されていると思います。ご高覧いただけますと幸いです。

・ボランティアセンターの目的と事業（2024 年度）

1．中期計画（21-25PLAN）

ボランティアセンターは、大学中期計画「21 - 25PLAN」の以下の3つの中期目標に基づいて事業計画を策定し、実施しています。

中期計画名称	事業名	2024 年度の成果
「For Others」の理念に基づく人材育成事業の充実	1. 国内外の課題解決を図る人材育成（学生スタッフ・コーディネーターの育成） 2. NPO 等との地域の課題解決への取り組み 3. 広報・啓発活動の更なる強化/認知度向上と行動の促進・拡充 4. ボランティアセンター活動報告書の作成	1. 演奏チームに学生コーディネーターが2名配置され活動のコーディネートを行った。学内活動以外にインターンシップに参加した学生に積極的に働きかけ、活動への参加を推進した。 2. NPO インターンシップ（NPO 法人アクションポート横浜）に8名の学生が参加。泉区障害者福祉自立支援協議会のメンバーNPO と協働プログラム実施を試みた。 3. ボランティア情報の発信頻度を1日1回に引き上げ、より多くの情報を提供した。コロナ後、外部団体からの募集情報が増加したため、情報精査と発信に努めた。 4. 学生の活動報告レポートの掲載を通じて、学生の活動報告の場と学びを深める場としての活動報告書本来の目的を強化した。
社会的課題への取り組み機会の拡充	1. 地域・地方自治体・市民社会との連携 2. 被災地支援の拡充 3. 他大学のボランティアセンターとのネットワークの拡充、プロジェクトの実施 4. 学生によるボランティアセンター及びボランティアに関する広報の拡充 5. SDGs 及び ESD に関するプロジェクトの拡充	1. 前年度に引き続き、泉区社会福祉協議会ボランティアセンターの運営委員を担っている。中間支援 NPO を通じて社会福祉協議会や地域ケアプラザコーディネーター、横浜市市民局下の各区活動支援センタースタッフとの経験交流の機会を通じて連携方法を模索した。 2. 被災地支援としての具体的な活動展開には至っていない。被災地支援ボランティア活動補助費については、被災地に限定せずボランティア活動補助費として枠を広げ実施した。 3. 東京ボランティア・市民活動センターが主催する関東地区大学ボランティアセンターネットワーク「ほんわかねっと」の研究会に参加。また同団体主催の全国大学ボランティアセンター調査（2024 年度～2025 年度）に参画。

・ボランティアセンターの目的と事業

	6.国際協力・地球規模の課題への取り組み	4.チラシの作成等、SNSの発信に協力。 5.外部団体からのSDGs及びESDに関する情報を積極的に一般学生に向けて発信、提供した。 6.国際協力・地球規模の課題に関する情報を積極的に一般学生に向けて発信、提供した。
意思決定を担う 女性への人材育成	1.女性のエンパワーメントの推進	1.ジェンダーセンターと共催で映画上映会などを実施した。

2. 2024年度の活動をふりかえて「社会連携・地域連携」

2005年中教審、2018年の中教審において、高等教育機関による社会貢献、社会連携・地域連携を目指す生涯教育（学習）社会教育の推進が強化され、社会連携センターを設置する大学が増えました。

ボランティアセンターは、「市民の自発的意思」と「社会課題への取り組み」を柱としており、それらの実現のためには社会連携・地域連携の活動は必須であり、大学における役割としては重なり合うところがあります。一方で独自の役割として、近年の市民社会の変化、多様化の中で「ボランティア活動」の役割はむしろ重要になっているのではないかと思います。

コロナの時期に高校生時代を過ごし、ボランティア体験の機会が少なかった世代が大学生となり、ボランティアの情報や意義を求めている学生と、全く知らない学生に二極化している中、2024年度は、学生にボランティアセンターの存在を周知することを優先課題としてさまざまな事業を実施しました。

以下、中期計画（21-25PLAN）に沿って2024年度の活動をふりかえります。

1)「For Others」の理念に基づく人材育成事業の充実：活動証明書の発行と全学生に対する情報提供の充実

長期継続のボランティアより単発のイベント型への参加が好まれる傾向が進んでいる。

そうした中で、ボランティアセンターで活動するグループのうち、運営スタッフというカテゴリーが成り立たなくなり、プロジェクトスタッフ（演奏ボランティアとソネのバラボランティア）でその代替機能を補うことも難しくなってきた。そこで学生スタッフに限定せずにボランティアセンターに関わる学生全体に働きかけを行い、特にNPOインターンシップに参加した学生の反応が良かったため、ボランティアセンターの行事を“手伝ってもらう”という形を取り徐々に定着しつつある。

例年5月に学生スタッフの委嘱式を実施しているが、学生から、事前に委嘱をするのではなく、1年間終わった時点で年間を通じて継続的にボランティアセンターの活動に関わった学生に対して「活動証明書」を発行するスタイルに変更してはどうかという提案があり、今年度よ

．ボランティアセンターの目的と事業

り活動証明書を発行することに切り替えた。「やってみて自分に合うかどうかを確認したい」という意味合いもあり、最初から委嘱されて責任を伴うというやり方より、1年間頑張った学生の努力を評価するというスタイルで当面実施していく予定である。

情報提供メールシステムでのボランティア情報発信は、年間 160 件を超え、情報を見て活動に参加する学生も増えているという手ごたえがある。本システムでは、学生はボランティアセンターを介する必要があるため、学生の参加状況、活動状況を把握することはできないが、次年度は可能な範囲で活動に参加した学生の情報を集め、その経験知を他の学生へフィードバックできればと思う。

2) 社会的課題への取り組み機会の拡充：地域との連携

今年度は、NPO インターンシップ主催団体のアクションポート横浜を通じて、地域の組織・団体と知り合う機会を多く得ることができた。

地域ケアプラザのコーディネーターとの交流（2024 年 12 月 17 日）

地域ケアプラザは横浜市独自の施設で、高齢者、子ども、障がいのある人など誰もが安心して暮らせるように福祉施設拠点として作られている。

ケアプラザのコーディネーターのネットワークを目的とした勉強会「横浜コーディネーターキャンパスゼミ」の受け入れを緑園キャンパスで行い、泉区新橋ケアプラザの活動紹介、フェリス緑園キャンパスの案内やボランティアセンターの活動紹介、学生スタッフも参加し活動紹介を行うなど、相互の活動についてより深く知る機会を得た。

横浜市民局主催ネットワーク会議へ参加（2025 年 1 月 20 日）

横浜市各区に設置されている地域活動支援センターのコーディネーター・職員のネットワーク会議にて、大学ボランティアセンターの仕組みについて情報提供を行い、意見交換をした。働き手を求める支援センターと、学生の経験の場を求める大学ボランティアセンターがどのように協働したらよいか、建設的な議論となった。

学生の意識調査では、活動してみたい関心分野の中で「まちづくり」は上位に来ている。地域に根差した活動への参加は、まちづくり活動の基盤となるので、今後の新しい活動の開発を目指していきたい。

3 . ボランティア活動科目履修

2024 年度、履修登録を行った学生と活動内容は以下の通りである。NPO インターンシッププログラムでの活動時間と履修に必要な活動時間が合致しているため、プログラム参加者からの履修登録が増えた。

科目名	履修者	前期	後期	活動内容
ボランティア活動 (中期)(90 時間)	音楽芸術学科 2 年	1 名		特定非営利活動法人 横浜 NGO ネットワーク

・ボランティアセンターの目的と事業

	国際交流学科 2 年	1 名		特定非営利活動法人 横浜 NGO ネットワーク
ボランティア活動 (短期)(45 時間)	国際交流学科 2 年		1 名	NPO 法人リロード

4 . その他

学内組織・ボランティア系団体との連携

- ・ 宗教センターの協力を得てアンネのバラ礼拝の実施
- ・ 宗教センター、国際センターと共同で、アジア学院スタディツアーの実施
- ・ ジェンダースタディーズセンターとの共催で映画上映会の実施

学外組織との連携

- NPO インターンシップ系ボランティア (2009 年度開始事業)
- 国際機関実務体験プログラム (2005 年度開始事業)
- 泉区社会福祉協議会ボランティアセンター運営委員会への参加
- 日本ボランティアコーディネーター協会 (JVCA) 会員
JVCA 正会員登録
- 関東地区大学ボランティアセンターネットワーク (ほんわかねっと) への参加
- 東京ボランティア・市民活動センター 全国大学ボランティアセンター調査

・活動報告

2024 年度活動報告

1 . 活動一覧

4 月 2 日 、3 日	ボラセン・バリフリ合同説明会（対面）	参加者 85 名
4 月 4 日	学生スタッフによる履修相談	2 名
4 月 18 日 ~5 月 17 日	ボランチ開催（新入生勧誘期間）	
4 月 22 日	NPO インターン体験談	12 名
4 月 23 日	履修相談会	2 名
5 月 13 日	学習支援ボランティア活動説明会（学生体験談）	
5 月 16 日	NPO インターンシップ説明会（オンライン）	
5 月 22 日 ~24 日	国際機関実務体験プログラム（夏期）説明会	8 名
5 月 27 日	ボランティア活動科目履修説明会	5 名
5 月 30 日	公開授業「NPO 法人鎌倉てらこや「目の前の「遊び」が社会を変える」担当教員 空由佳子先生 / ゲスト 小木曾駿氏（認定 NPO 法人鎌倉てらこや副理事長・事務局長）、学生スタッフ 2 名	38 名
6 月 6 日	ポプリ作りワークショップ	8 名
6 月 12 日	学生スタッフ委嘱式	
6 月 14 日	アンネのバラ記念礼拝	
6 月 15 日 ~16 日	アジア学院スタディツアー(宗教センター、国際センターと共同)	
6 月 27 日	「フェリス卒業生にきく、国際貢献の様々な在り方」ゲスト 今野沙織さん（2009 年卒、元学生スタッフ）	2 名
7 月 5 日	学習支援ボランティア交流会（振り返り会）	5 名
7 月 23 日	映画上映『医学生、ガザへ行く』（ジェンダーセンターと共同）	
9 月 13 日	NPO 法人コミュニティだんだんにて演奏ボランティア「テーマ：すずかぜ」（演奏ボランティアチーム）	
9 月 29 日	NPO 法人四季の会センター芽生え地域交流会で演奏ボランティア	
10 月 7 日	学習支援ボランティア説明会	
10 月 18 日	NPO 法人四季の会協働プログラム「Inclusion & Diversity ~ お話とワークショップ」	4 名
10 月 25 日	アンネのバラ看板デザイン募集	8 名
11 月 3 日 ~4 日	大学祭参加（YNN（横浜 NGO ネットワーク）SDGs よこはま CITY、	

・活動報告

	四季の会協働 展示、フェアトレード商品販売、クッキー販売等	
11月19日	アンネのバラ植樹記念礼拝	
11月20、22、26、27日	国際機関実務体験プログラム（春期）説明会	4名
11月28日	アンネのバラ看板デザイン審査会（アンネのバラボランティアチーム）	
12月1日	5校種ジョイントコンサート（緑園高校）協力：音楽学部	
12月1日	NPO 法人四季の会講演会にてオープニング／クロージング演奏	ボランティア学生2名
12月4日	アンネのバラ看板デザイン授賞式	3名
12月9日	履修説明会	2名
12月14日	映画上映会『アリラン・ラブソディ』ジェンダーセンターへ協力	
12月16日	学習支援ボランティア後期振り返り会	2名
12月17日	NPO 法人アクションポート横浜主催「横浜コーディネーターキャンパスゼミ」受入	23名
12月19日	クリスマス会	10名
1月6日	矢野久美子先生公開授業「ゲストスピーカー：清末愛砂先生（室蘭工業大学大学院教授）「平和に生きる権利は国境を超えるーパレスチナ・アフガニスタン・日本」	
1月7日	福島カフェ（環境省「福島、その先の環境へ。ツアー」参加学生体験報告会	8名
1月23日	ボランティアセンター学生生活動報告書授与式	5名
1月30日	アンネのバラ看板設置	

・活動報告

2. センターの利用状況

1) 利用学生数

今年度途中より、統計の取り方を、初回来訪者数でのカウントから延べ人数へと変更しました。傾向として、前期は初回訪問者が多く、後期はそれらの学生が繰り返しボランティアセンターを利用するという形になっています。

月	初回来訪者数	月	延べ人数
4 月	32	9 月	13
5 月	13	10 月	33
6 月	2	11 月	40
7 月	1	12 月	21
8 月	2	1 月	26
		2 月	0
		3 月	0
合計	50 名	合計	133 名

ボランティアセンター開室時間	月～金 10 時～17 時
----------------	---------------

2) 情報提供～メール登録システム

2023 年度登録学生数	約 220 名
2024 年度登録学生数	約 240 名

情報発信数：150 件（原則、1 日 1 通ペースで毎日 18:00 に配信）

3) 学外からのボランティア情報

【学外団体からのボランティア募集や勉強会・セミナー参加募集の状況】

募集主体の種別（69 団体）

NPO 法人	24	かながわ国際交流財団	1	小学校	1
任意団体	9	あーすぷらざ	1	中学校	1
公益財団法人	5	環境省	1	大学ボランティアセンター	1
地域ケアプラザ	4	企業	1	行政（区民活動センター）	1
社会福祉法人	3	横浜市国際交流協会	1	行政（区役所）	1
社団法人	2	国連 UNHCR	1	行政(神奈川県)	1
社会福祉協議会	2	自立支援協議会	1	行政（横浜市）	1
横浜市教育委員会	1	青年会議所	1		1
一般財団法人	1	独立行政法人(JICA)	1		1

・活動報告

募集主体の活動分野

分野	件数	左記のうち勉強会・セミナー
国際協力、SDGs 等	12	6
福祉（障がい児・者、知的障がい・発達障がい、パラスポーツ等）	11	
まちづくり	10	
環境、環境保全	7	
学習支援	6	
子ども	4	
グローバル人材育成、人材育成	4	4
教育	3	
被災地支援、復興	3	1
青少年活動、野外活動・キャンプ	3	
多文化共生	2	2
人権	2	1
観光ガイド	1	
国際交流	1	
子ども食堂	1	
コミュニケーショントレーニング	1	1
図書館（海外の絵本）	1	
難民支援	1	1

情報提供メールでボランティア活動に参加する場合は、学生が直接主催団体に連絡するシステムなので、すべての活動についてボランティアセンターで把握していない。学生や主催団体からいただいた情報では、2024 年度、下記の団体・活動に学生が参加していることがわっている。

- ・老人ホーム白寿荘演奏ボランティア
- ・横浜コミュニティデザイン・ラボ主催イベント「留学生とつながる会」
- ・福祉よこはまライター募集
- ・ベトナムフェスタ
- ・地球っこ教室（見学）
- ・よこはまユース
- ・こどもの夢商店街@三井アウトレットパーク横浜ベイサイド
- ・泉区社会福祉大会司会
- ・福島、その先の環境ヘツアー2024
- ・教育支援協会南関東
- ・寿町バザー

．活動報告

3．活動紹介

1) 新入生向けボランティア説明会（ボラセン・バリフリ合同説明会）

実施日時	4月2日（火）15時10分～15時40分 4月3日（水）11時00分～11時30分
場所	キダーホール グリーンホール
実施目的	新入生向けにボランティアセンターおよびバリアフリー推進室の活動紹介
参加者	50名 35名 計85名
アンケート	回答数 43名 25名 計68名



今年度もバリアフリー推進室と合同で新入生向け説明会を実施しました。対面での実施は5年振りとなりました。

司会は2日が国際交流学科4年生が、3日は音楽芸術学科4年生が担当しました。

ボランティア説明会参加学生の学科分布（出席票回収68名）

実施日	英文	日文	コミュ	国際	音芸	小計
4月2日	6	8	8	21	0	43
4月3日	2	1	5	13	4	25
					総合計	68

新入生新歓期間である4月18日（木）～5月17日（金）の昼休みに、ボランチを開催しました。延べ約82名の学生の訪問や問い合わせがあり、ボラセンでの活動やボランティアについて紹介しました。

・活動報告

2) ボランティア養成講座

< vol.1 履修相談～活動と授業の両立 >

実施日時	4月4日(木) 12時20分～12時50分
場所	オンライン (Zoom)
実施目的	学生スタッフが、自身の経験をもとにボランティアセンターでの活動と大学の授業の両立について説明
参加者	新入生 2名

< vol.2 NPO インターン参加体験談 >

実施日時	4月22日(月) 12時20分～12時50分
場所	オンライン (Zoom)
実施目的	NPO インターンシッププログラムに参加経験のある学生による体験談。
参加者	12名

< Vol.3 ボランティア活動科目履修相談 >

実施日時	4月23日(火) 12時20分～12時50分
場所	ウエルカムセンター
実施目的	ボランティア活動科目の履修登録の流れについての説明
参加者	3名

< Vol.4 学習支援体験談 >

実施日時	5月13日(月) 12時20分～12時50分
場所	オンライン (Zoom)
実施目的	学習支援ボランティアについての説明、これまでの実績について、ボランティア活動科目履修について、参加学生による体験談、質疑応答
参加者	4名
担当	英語英米文学科 4年 1名、上條コーディネーター

< vol.5 国際機関実務体験プログラム募集案内 >

実施日時	5月22日(水) 12時20分～12時50分
場所	オンライン (Zoom)
実施目的	横浜市国際交流協会によるプログラム説明会。2023年度フェリス派遣生(国際交流学科2年)の体験談
参加者	8名

・活動報告

< vol.6 ボランティア活動科目履修について >

実施日時	5月27日(月)12時20分～12時50分
場所	オンライン (Zoom)
実施目的	ボランティア活動科目の履修登録の流れについての説明
参加者	5名

< vol.7 公開授業 >

実施日時	5月30日(木)12時20分～13時10分 講演会、 13時10分～ 授業内交流会
場所	8206 教室
実施目的	授業名：ヨーロッパ社会史 テーマ：目の前の「遊び」が社会を変える ～NPO 法人鎌倉てらこや～ 担当教員：空 由佳子先生 (国際交流学科) ゲスト講師：小木曾 駿氏 (NPO 法人鎌倉てらこや副理事長・事務局長)
参加者	40名

ボランティア養成講座 vol.7 として、国際交流学科の空先生の授業「ヨーロッパ社会史」の公開授業に、ボランティアセンターが協力という形で参加しました。

35名ほどの学生が参加し、ゲストの小木曾氏の講演はもちろん、鎌倉女子大学の学生スタッフさんからも良い刺激をいただいたようです。

【参加学生の感想】(一部抜粋)

- ・子どもたちにとって大人でも子どもでもない中間の存在である大学生は、大人に比べ近い視線で関われる貴重な存在であることがよくわかった。けんかなどが起こった時、大学生の仲裁によってその場で感情の整理ができるのは良いと思った。
- ・不登校やひきこもりなどの子どもたちの「居場所」をつくることで、子どもたちの遊びや学びにつながるといところがステキだと思った。
- ・ボランティア活動を自分もしていきたいと感じた。
- ・全国てらこやネットワークによって、スクールソーシャルワーカーと連携したりなどの活動が浸透し続けて欲しい。
- ・子どもたちにしか分からない何かの違和感やひっかかる部分を明確にして、悪い思いを解消していく場に魅力を感じました。不登校のきっかけをつくらない or 解決する「てらこや」さんがなぜ大学生が活躍できるのかもすっかり理解しました。
- ・若者が都市へ行ってしまうことなどが、新たな問題を生んでしまっているということを考えたことがなかったので驚きました。
- ・私もてらこやの子どもたちと似た経験をしたことがあるからこそできることを考えたいです。

・活動報告

・不登校だけの集まりではなく、不登校ではない小中学生も一緒に活動している点が魅力的に感じた。

・学校や家庭以外にも居場所を作ることが現代では難しい中で、このような取り組みを実践されていることが良いと思いました。私の住む地域は移住してくる家族が年々増加し、昔のような地域密接な催し物など開催が難しくなりました。当たり前にあった交流がなくなり、さみしい気持ちと今の地域の子どもたちが地域と関わりがなくなったことを心配しています。

・ボランティアに関心があってもどうしても参加できるのか、どういったことがあるのか知らなかったのも、講義を通して知ることができて嬉しいです。

・子どもの頃にお手本を色々知っていると、困ったときに孤独を感じずに問題を解決できることで自信につながるのではないかなと思いました。

・不登校は少しのきっかけで誰にでもおこりうるものであり、てらこやは不登校、ひきこもりの困難な状況に陥らないための未然防止活動をしているのだと知ることができました。感動体験やよき人との出会いを経験することで、一人前の大人に育ってほしいなと思いました。

< vol.8 空先生とポプリ作りをしよう！ >

実施日時	6月6日(木) 12時20分～13時
場所	ウエルカムセンター
実施目的	空先生とのポプリ作りワークショップを行いました。一般学生8名の応募があり、ボラセン学生スタッフと合わせて12名の参加となりました。当日は4グループに分かれ、まずはそれぞれ自己紹介をしました。どのグループも楽しくおしゃべりをしながら作業し、81個のポプリが完成しました。完成したポプリは、アンネのバラ記念礼拝にてお配りしました。
参加者	空 由佳子先生(国際交流学科) 参加者：学生スタッフ4名、一般学生8名 (計12名)

【参加学生の感想】(一部抜粋)

・素敵な香りに包まれてとても楽しかったです！

・良い香りでもっとも癒されました。また参加したいです。

・ポプリ作りは初めての体験でした。フェリスのアンネのバラを沢山の人が喜んでもらえたら嬉しいです。

・ポプリ作りを通して、参加者のみなさんと交流ができて楽しかったです！！



・活動報告

< Vol.9 フェリス卒業生に聞く、国際貢献の様々な在り方～学生時代の国際機関インターン、海外大学院進学、NPO 活動を通じて～ >

実施日時	6月27日(木)12時20分～13時
場所	オンライン (Zoom)
実施目的	ゲスト：今野 沙織氏 (2009 年卒) 内容： 大学時代、ボランティアセンターで経験した活動、インターンを通じて広がった様々な世界 社会人として国際協力業界の経験を積みながら、ボランティアで中東の平和構築に取り組んでいた頃のお話 今、大学時代を過ごす学生の皆さんへのメッセージ
参加者	国際交流学部 2 年 1 名・1 年 1 名、英語英米文学科 1 年 1 名 (計 3 名)

【今野さんのお話】

< 関心を持ったきっかけ >

大学 2 年のときに (日・韓・在日学生平和協働プログラム) で韓国に行ったことをきっかけに、国際協力方面をやりたいなと思いました。卒業後海外の大学院で勉強したいと思い、どういう環境か全く分からなかったのも、一回休学をして 3 年次終了後に 1 年間語学留学をしました。そして、さらにフェリスを卒業したあとサセックスの大学院に留学しました。現在、4 社目ですが、会社で仕事をしながら 3 歳の娘を育てています。

私の“やりたいこと”がぼやっとしていたときに、ボラセンで在日問題や韓国の従軍慰安婦問題を考えるプログラムに参加して、日本と韓国の学生と一緒に話をしながら、韓国で従軍慰安婦の方にお話を聞いたりしました。このプログラムがきっかけで、ボラセンの活動を注視するようになり、国際機関実務体験プログラムで当時みなとみらいにあった国連大学で生物多様性を専門としているフェローの人たちのサポートや、国際会議運営のサポートをしました。そのころにはすでに大学院に行きたいと思っていたので、そのために必要な経験をもっと積まなければと思っていました。また、実務的に推薦状を誰に書いてもらおうか？と考え、UNHCR で広報・渉外インターンを募集していたのでチャレンジしました。国連機関のインターンは大学院生しか本来は受け入れないのですが、当時 20 年近く前は、今ほどインターンが活発になる前で、難民問題もいまほど話題になっていなかったのも、ダメ元で応募し、OK をもらい 1 年間インターンをしました。電話の取次ぎや調べもの、そして UNHCR コースを立ち上げたのは一番大きかったです。大学サークルで難民問題に取り組むところがあったので、当時の事務局長がそれらをつないでムーブメントを作りたいということで、どうやったら日本で難民を認知してもらえるか、ということを経験で考えました。それがきっかけで UNHCR の街頭募金のアルバイトをしたりしました。

・活動報告

< 学生時代の活動 >

NPO の活動もはじめて、ピースフィールドジャパン (PFJ) という団体に、大学 3 年生の頃に会って、中東のイスラエル・パレスチナの青少年に対して平和構築の活動をしようというものでしたが、山梨県で自然に触れながら、一緒に未来を見ていける青少年を育てようということで、夏に行われる絆プロジェクトを 20 年近く実施しています。里山を場所に、対話やブレスト、他大学の学生と一緒にアクティビティのファシリテーターをしたりしています。

それ以外に NPO の活動として、中東問題やイスラム文化をみんなに知って欲しいということでハラルフードで PFJ カフェを開いたり、現地にいった参加者に会って様子を聞いたり、グローバルフェスタに参加したり、料理教室をやったり、ユースの中で自主的に企画したい人が実施しています。学生が企画して広報して運営しているというスタンスです。これが今も続けている NPO の活動になります。

< 留学について >

大学を卒業してイギリスのサセックスの IDS (開発学研究機関) のジェンダー & デベロップメントを学びたいと思って留学しました。小さなクラスでしたが、ケニアからなど多種多様な人が集まり仲良かったです。1 年間、とても忙しく、エッセイを何本も読んでディスカッションするという日々でした。

事前に、大学 3 年生のときに 1 年間留学したのが良かった。学部時代に現地生活に慣れ、スコアも学部時代にとれていたのも、そこまでの不安はなく留学しましたが、英語での大学院は結構タフでした。1 年間でしたので詰めこみで勉強していました。2 年間留学する人にとっては 1 年は短いと思われるかもしれません。

< 卒業後、西友に就職 >

帰国後、9 月に修論を出して大学院を修了し、翌年の 4 月から働かなければならないのに、就活は終わっている時期でしたので、中途採用の就活をして、数社から OK をいただきました。その中で、海外の大学生に向けた会社説明会を留学エージェントの人から勧められて参加したら、西友がウォルマートジャパンが出資していた外資で、英語がしゃべれる学生が欲しいということで、海外との接点も多く、おもしろそうと思って受けて受かったという感じです。小売業だったので、1 年間の店舗経験ののち、本部の商品部に異動し、バイヤーになりました。ハムやソーセージ、デザートバイヤーをしました。セントラルバイイングというスタイルをとっていて、日本全国の商品を一手に引き受け買い付けに行っていました。当時、コンビニなどでも今までにないデザートが売られるようになり、スーパーでも出さないといけないという流れになっていて女性バイヤーを集めて、個食デザートの開発が始まり、それを担当しました。いろいろなメーカーのものを食べて、値付けから陳列まで一人で考えるのは楽しかったです。ウォルマートの総会に通訳で行かされて、ウォルマート 50 周年の大規模な株主総会で、日本の西友の説明をすることになり、株主もそうですが、世界各国のアソシエイトの前で発表するという大きな舞台の経験をさせていただきました。

・活動報告

<西友から JICE へ>

3 年半、西友での経験ののち、やっぱり海外に関わる仕事をしたくなって、JICE (日本国際協力センター) に入り、経産省の補助金事業でアブダビで、日本語普及事業と日本への招聘事業を担当することになり、3 年くらいこの仕事をしました。中東、アブダビはオイルがたくさん出る地域で、日本は UAE からのオイルに頼っていることから、経産省としては人的支援を通じて交流を深めたいという意図があり、人的プロジェクトを得意とする JICE がこの案件をとり、私がこの 2 つの事業を担当しました。アブダビに 4 つ大学があり、日本語コースを立ち上げました。紆余曲折がありつつも、日本語の先生を派遣し、先生の生活管理や何もかも一人でやりました。日本語の専門の社員とカリキュラムを考えたりしました。アブダビ大学の日本語講座を開講し、スピーチコンテストを実施したりしました。日本のアニメもすごいし、日本語への興味がすごくあって、学ぶ機会もなかったのが、ニーズがありました。現地ニーズとのすり合わせをしたり、日本に留学してみたいなという学生を大学で集めて選抜してもらい、日本に招待をする、事前のオリエンテーションをしたり、地方に行く経験を取り入れて仙台の高校生と交流をしたりというアレンジをしました。こうしたロジスティックスの仕事も良い経験でした。

アブダビで留学フェアがあったとき、ジャパンプースで日本を紹介したり、日本語コースの学生に話をしてもらったりしました。

<JICE からパシフィックコンサルタントへ>

そのあと、JICE から出向する形で、パシフィックコンサルタントという建設コンサルタント会社に行きました。建設コンサルタントは一般的に地方自治体の公共事業の計画やアドバイザリー業務をします。地方自治体が発注元になります。アドバイスを行うのですが、海外事業部にいたので、途上国の ODA 事業や普通の民間支援としては海外進出をしたい企業へのアドバイスなどが主な仕事でした。最初の仕事は、アメリカでのインフラ老朽化調査を国交省から請け負って行いました。老朽化の実態把握、ヒアリング、日本のテクノロジーが参入できる可能性がないかを調査してもらいたいという案件があり、3 人で行きましたが、アメリカのいろいろな州の公共事業をやっているところへ行って、ヒアリングし、どんな技術を日本が提供できるかを最終的には報告書としてまとめるという仕事でした。地方政府とコネクションなど無いので、夜中にアメリカに電話をしまくり、アポとりをしました。

<NEDO へ>

そのあとは、NEDO (国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構) といって、再生可能エネルギーや非化石エネルギーの事業を受注し、ホンダとパナソニックとでインドネシアに二輪車の搭載する電池交換という実証実験を行い、パシコンは、全体のアドバイザリー業務を行いました。3 年間、このような仕事をし、その中でも SPC = special purpose company をたてて、そこを通じて仕事を受注するという仕組みで、現地で SPC を設立して、日本から人を送る、という仕事をしました。インドネシアの会社法や弁護士とのやりとり、会計事務所とのやりとりなどを現地で行い、現地法人を立ち上げ、実際に現地で運営するための費用支払い、収支報告書、監査など、こうしたまれな経験をしました。設立したあとは日本から人が派遣されて NEDO のプロジェクトを推進していくということをしました。

・活動報告

出産を機に、育休から戻ってきて海外には行けないので日本でやれる仕事ということで、グアムの案件で通訳やコーディネーション的なことをしたりしました。パソコンでの仕事も楽しかったが、なかなか海外に行けないと限界もあり、日本でこれまでの経験を活かせる仕事はないか、ということで SSE パシフィコという会社に転職しました。洋上風力発電開発会社です。外国籍の社員が半数で、英語で仕事をします。日本の北海道や銚子などの漁村でテリトリー内で風力発電を建設していくとなると、地元の漁業関係者との折衝が大切になるので、そういうチームや設計エンジニアチーム、開発地域開拓チームなどに分かれています。公共事業は入札で行われるので、入札チームもあります。私は日本でテレワークしながら、幅広い業務をしています。英国の親会社の規則にのっとってやらなければならないことが多いので、結局窓口になるのは英国の担当者になるので、今はほとんど英語を使って仕事をしています。外資なので、テレワークは全然問題なくやれています。

学生時代の話に戻ると、国際機関実務体験プログラムをきっかけに YOKE とのつながりができて、多文化共生事業で中区の多文化フェスで司会を頼まれたり、いろいろな経験をする機会がありました。大学時代は何でもやってみて損はない。他の人にはなさそうなユニークな経験を積み重ねていくことが大事です。その中で失敗経験をどう改善、克服したのか、という分析の意識を持つことと、幅広くネットワークを作ること、やっておいて損はないことだと思っています。無駄な経験は一切ない、自分の幅を広げること、ポジティブに学生という特権を活かしてやればよいのではないかと思います。

・活動報告

< vol.10 学習支援ボランティア募集説明会 >

実施日時	10月7日(月) 12:20~12:50
場所	2304 教室
実施目的	学習支援ボランティア活動中の学生による、体験談と質疑応答
参加者	8名
担当	英語英米文学科4年1名、英語英米文学科2年1名、国際交流学科2年1名

< vol.11 履修説明会 >

実施日時	10月11日(金) 12:20~12:50
場所	オンライン (Zoom)
実施目的	ボランティア活動科目履修の具体的な手続き方法について
参加者	2名

< vol.12 インクルージョン&ダイバーシティ >

ケアで『輝く』存在になる—インクルージョン&ダイバーシティの理解から

実施日時	10月18日(金) 6限 (18時10分~19時40分)
場所	2304 教室
実施目的	講師：引地 達也先生 (コミュニケーション学科准教授) ゲスト：根本 響子氏、根本 俊史氏 (四季の会利用者)
参加者	音楽研究科1年1名、音楽芸術学科4年1名・3年1名、英語英米文学科1年1名 四季の会職員3名 バリアフリー推進室職員1名、上條コーディネーター (計9名)
共催	NPO 法人四季の会

2年前に大学祭に出店していた四季の会から声をかけていただき、ボランティアセンターとの交流が始まりました。NPO 法人四季の会は、泉区の住民の「こころの健康と福祉」を支える団体のひとつで、精神障がいを持っている人たちと交流し、自立、就労、社会参加への促進の手助けをし、精神障がい者が住みやすい社会の実現を目指しています。

協働プログラムとして「ボランティア養成講座



・活動報告

インクルージョン&ダイバーシティ」を10月18日(金)に開催しました。文学部コミュニケーション学科准教授 引地達也先生による「ケアで『輝く』存在になる—インクルージョン&ダイバーシティの理解から」と題するレクチャーと、四季の会を利用している当事者である根本響子さん、根本俊史さんから、統合失調症経験者として具体的な症状や生活の様子について体験談をお聞きするという、大変貴重な時間を持ちました。

ここまで深いお話を直接当事者に聞くことはなかなか無い機会だと思います。

講座では、お二人が開発に関わっている精神障がいのある方々が“リカバリー(回復)”するための学習プログラム「あいりき(愛する力を磨く)」のロールプレイを参加学生と一緒に体験し、学びを深めました。

メンタル、すなわちこころの健康は、すべての人に関係することです。でも、こころの健康をそこなうということについて、意外と私たちは正しく理解していません。この講座では、精神障がいを持つ人との間に感じる“壁”のひとつが理解不足であることに気づき、正しい理解とお互いを理解しようとする気持ちを育んでいきたいと思っています。「障がい」を個人の問題からばかりではなく、社会側の問題として見る「社会モデル」の理解も不可欠です。

ボランティアセンターとしてこうした学びの場を、地域のNPOの方々と一緒に継続し、広げられたらと思います。
(大学HP フェリスを綴るより引用掲載)

< vol.13 履修相談会 >

実施日時	11月11日(月)12:20~12:50
場所	ボランティアセンター
実施目的	ボランティア活動科目履修の具体的な手続き方法について
参加者	なし

< Vol.14 履修相談会 >

実施日時	12月9日(月)12:20~12:50
場所	ボランティアセンター
実施目的	ボランティア活動科目履修の具体的な手続き方法について
参加者	2名

・活動報告

3) 大学祭

2024年11月3日から4日まで、大学祭が開催されました。昨年に引き続き SDGs よこはま CITY、特定非営利活動法人 四季の会とコラボし、各団体の紹介展示、フェアトレード商品やクッキーの販売をしました。



■ 展示

- ・ボランティアセンターの活動紹介（パネル）

ボラセン 20 年の歴史、アンネのバラ、演奏ボランティア、アジア学院スタディツアー

- ・リーフレット
- ・アンネのバラ 20 周年リーフレット
- ・ボランティアセンター2021～2023 年度活動報告書



- ・SDGs よこはま CITY 各団体、四季の会の活動紹介（パネル）

■ 販売

- ・フェアトレード商品
- ・クッキー販売 4 日のみ

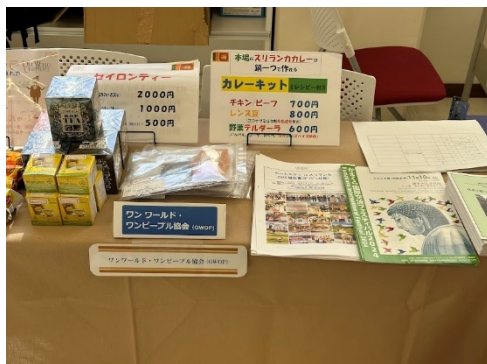


・活動報告

< 参加団体 > 順不同

販売・展示

- ・ハイチの会 セスラ
- ・特定非営利活動法人 LOOB JAPAN
- ・ワンワールド・ワンピープル協会
- ・特定非営利活動法人 Global Bridge Network
- ・国際協力 NGO Act for Child
- ・特定非営利活動法人 イランの障害者を支援するミントの会
- ・特定非営利活動法人 四季の会 4 日のみ販売のみ
- ・特定非営利活動法人 光の子どもたちの会
- ・特定非営利活動法人 WE21 ジャパン 展示のみ
- ・東海大学国際学部
- ・横浜隼人高等学校国際語科
- ・アジアの女性と子どもネットワーク
- ・NPO 法人 リンクトゥミャンマー
- ・神奈川ユニセフ協会
- ・横浜ユネスコ協会
- ・NPO 法人 シニアボランティアを活かす会
- ・公益社団法人 神奈川県歯科医師会
- ・認定 NPO 法人 パレスチナ子どものキャンペーン
- ・外国人住民基本法の制定を求める神奈川キリスト者連絡会
- ・NPO 法人 JECK 国際協力専門家コンサルティング



・活動報告

4) 使用済み切手・書き損じはがきの収集と寄付(2008 年度開始事業)

使用済み切手、書き損じはがきなどを回収し、学校法人アジア学院、日本キリスト教医療協力会、シャプラニール＝市民による海外協力の会などへ寄付を行っている。今年度は、アジア学院スタディツアーを実施したため、訪問の際に持参し、寄付を行った。

5) ペットボトルキャップの回収(2008 年度開始事業)

緑園キャンパス、山手キャンパス合わせて 26 か所に回収 BOX を設置し、定期的に回収を行っている。回収されたキャップは、搬入先として NPO 法人ともにあゆむに引き取ってもらい、換金したものを JCV(認定 NPO 法人世界の子どもにワクチンを日本委員会)に寄付するという仕組みで実施している。

キャップアクションキャンペーン 2024 が 6 月 3 日～7 月 1 日に行われた。Instagram でペットボトルキャップが写った写真や動画に「#キャップアクション」を付けて投稿すると、協賛企業各社を通して 1 人分のワクチン支援につながるというキャンペーンで、フェリスボラセンとして参加をした。

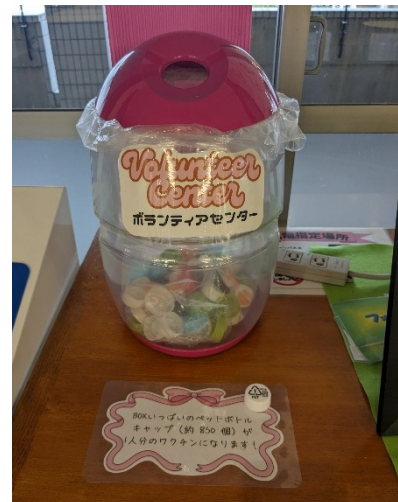
集計日	回収数	ポリオワクチン	回収重量	CO 削減量
2010 年度	45,600 個	57.00 人分	114.0kg	359.10kg
2011 年度	60,480 個	75.60 人分	151.2kg	476.28kg
2012 年度	80,539 個	97.30 人分	194.5kg	612.68kg
2013 年度	43,344 個	50.40 人分	100.8kg	317.52kg
2014 年度	58,093 個	67.50 人分	135.1kg	425.57kg
2015 年度	39,904 個	46.40 人分	92.8kg	292.32kg
2016 年度	41,495 個	48.25 人分	96.5kg	303.98kg
2017 年度	36,808 個	42.80 人分	85.6kg	269.64kg
2018 年度	37,152 個	43.20 人分	86.4kg	272.16kg
2019 年度	36,808 個	42.80 人分	85.6kg	269.65kg
2020 年度	24,854 個	28.90 人分	57.8kg	182.07kg
2021 年度	34,271 個	39.85 人分	79.7kg	251.06kg
2022 年度	30,788 個	35.80 人分	71.6kg	225.54kg
2023 年度	30,788 個	35.80 人分	71.6kg	225.54kg
2024 年度	27,606 個	32.10 人分	64.2kg	202.23kg
累計	628,530 個	743.70 人分	1,487.4kg	4,685.34kg

・活動報告

* 2kg（860 個）でポリオワクチン 1 人分が購入できる。
（ペットボトルキャップが軽量化され、2012 年 9 月 1 日より 1kg=400 個より 430 個に変更された）
* ペットボトルキャップは、仮にごみとして焼却されると 1kg で 3,150g の二酸化炭素が発生します。

キャップの収集・洗浄にご協力下さった方々に心より感謝申し上げます。

緑園キャンパス、山手キャンパス合わせて 26 か所に回収 BOX を設置し、定期的に回収を行っている。回収されたカップは、搬入先として NPO 法人とともにあゆむに引き取ってもらい、換金したものを JCV（認定 NPO 法人世界の子どもにワクチンを日本委員会）に寄付するという仕組みで実施している。



6) 寿町バザーへの支援

学内にバザー献品の呼びかけを行い、集まったものを
ご寄付した。

[illegible]

・活動報告

4．学生活動支援

1) ボランティア活動補助費の支給

学生の「ボランティアをしてみたい」を応援するために、活動に対して一定額の補助費を支給する制度です。2024年度は2名の申請があり、支給しました。

事業名	支給額	
こどものまち CBT2024 / 千葉市子どものまち CBT 実行委員会主催	20,000 円	音楽芸術学科 1 年
CFF ジャパン (マレーシア・サバ州の「子どもの家」でのワークキャンプ)	20,000 円	英語英米文学科 4 年

・学生ボランティアグループの活動

1. 登録学生スタッフ

2024 年度の登録学生スタッフは以下の通りです。

種類	学科・学年・人数
学生スタッフ（5 名）	国際交流学科 4 年 1 名 日本語日本文学科 3 年 1 名 コミュニケーション学科 2 年 1 名 音楽芸術学科 2 年 1 名 日本語日本文学科 1 年 1 名
プロジェクトスタッフ <アンネのバラチーム>（7 名）	国際交流学科 4 年 2 名 音楽芸術学科 4 年 1 名 コミュニケーション学科 2 年 1 名 音楽芸術学科 1 年 1 名 英語英米文学科 1 年 1 名 日本語日本文学科 1 年 1 名
プロジェクトスタッフ <演奏ボランティアチーム>（9 名）	音楽芸術学科 4 年 1 名 音楽芸術学科 3 年 1 名 音楽芸術学科 2 年 6 名 音楽芸術学科 1 年 1 名

2. 演奏ボランティアチーム

1) NPO 法人コミュニティだんだん

実施日時	9月13日(金)13時30分～14時30分
場所	コミュニティだんだん
対象	コミュニティだんだんのプログラムに参加している高齢者
演奏学生	音楽芸術学科4年2名、3年1名、2年1名、1年1名 計5名

「爽やかな時間を過ごしてほしい」という思いで「すずかぜ」をテーマにし、演奏学科のメンバー5名が心を込めて演奏しました。当初は8月30日を予定していましたが、荒天のため延期し、9月13日の開催となりました。暦の上では秋ですが、暑さも厳しく「すずかぜ」をテーマにするにはちょうど良い氣候でした。会場にはコミュニティだんだんのプログラムに参加している高齢者の方々やだんだんの樹のスタッフ約30名が集いました。

< プログラム >

1. 「夏色」(サクソ二重奏)
2. 「愛の夢」(ピアノ)
3. 「亜麻色の髪の乙女」(ピアノ)
4. 「アメージンググレース」(ハープ)
5. 「夏の思い出」(全員合唱)

【参加学生の声】

- ・距離が近く、反応が良いので演奏のしがいがあり嬉しい。
- ・距離が近いから反応がよく見え、緊張はするけれど楽しかった。
- ・(演奏の合間に)話をする時、目が合って楽しい。
- ・またこのような機会があれば是非参加したい。



2) 四季の会

地域交流会 in 生活支援センター芽生え

実施日時	9月29日(日) 11時～14時
場所	泉区生活支援センター芽生え
対象	センター芽生えの利用者、地域住民
演奏学生	音楽芸術学科4年1名、3年1名 計2名

泉区生活支援センター芽生えで行われた地域交流会に、演奏ボランティアチームの学生2名が参加しました。名探偵コナンのテーマと、ルパン三世のテーマを演奏しました。



精神保健福祉啓発活動・座談会

その人がその人らしく暮らすために！～精神障害者一人ひとりの描くライフデザインのサポート考える～

実施日時	12月1日(日) 13時～15時30分
場所	泉区民文化センター(テアトルフォンテホール)
主催	四季の会 / 泉区生活支援センター芽生え
後援	いずみ会
内容	登壇者：泉区内にて単身生活をしている精神障害当事者 ヴィラあさひ丘 施設長(生活訓練施設) ステップ四季 施設長(就労継続支援B型) 瀬谷区自立支援協議会 会長 泉区生活支援センター芽生え 施設長
演奏学生	音楽芸術学科4年1名、音楽芸術研究科1年1名 計2名
演奏内容	オープニング・クロージング演奏、来場者と合唱



・学生ボランティアグループの活動

3) めぐみ幼稚園クリスマス祝会

実施日時	12月14日(土)9時30分～11時
主催	日本基督教団横須賀上町教会附属めぐみ幼稚園
内容	第一部ページェント、第二部フェリス生による演奏 曲目 赤鼻のトナカイ、You raise me up、きよしこの夜、メドレー、レッ ト・イト・ゴー
演奏学生	音楽芸術学科4年1名、音楽芸術研究科1年1名 計2名
演奏内容	オープニング・クロージング演奏、来場者と合唱

3. アンネのバラチーム

1) ポプリ作りワークショップ

ポプリづくりワークショップ

実施日時	6月6日(木)お昼休み
場所	ウエルカムセンター
参加者	一般学生8名、スタッフ学生・教職員8名

国際交流学科 空由佳子先生と一緒にポプリづくりを楽しみました。



2) アンネのバラ記念礼拝

【アンネのバラ記念礼拝】6月14日(金)緑園チャペル

奨励 音楽芸術学科2年

みなさんは、「信じる」という合唱曲をご存知でしょうか？平成16年度NHK全国学校音楽コンクール中学校の部の課題曲として作曲されたもので、今日まで多くの人、特に学生に歌われてきた曲です。もしかしたらここにいらっしゃる学生のみなさんも、歌った経験をお持ちかもしれません。私は実際、中学3年生の合唱祭でこの曲を歌い、金賞を取ることができました。自身にとっても、思い出のある曲です。

この「信じる」の歌詞には次のような一節があります。

「信じることは生きるみなもと」

中学生の時、私はこの言葉に対して特に何の考えも持たず、ただ歌っていました。しかし、様々な経験を重ねた今、この曲を聞くと『信じる』とは一体何なのか。そして私は信じようと思ったことを本当に信じられているのか」という考えが生じました。

そのように考えたきっかけは、昨年度の春季休業中に参加した大学のキャリア実習でした。私は、日本ユニセフ協会という世界中の子どもたちへの支援を行っている公益財団法人でインターンシップを行いました。世界の子どもの現状はどのようなものか、私たちはどのような支援や協力ができるのか。実際に自分が支援する側の立場になることで、課題や支援についての理解が深まりました。

そして、そこで出会えた職員やボランティアの方々は、様々な困難に向き合う中でも打開策や可能性を見だし、支援に取り組んでいました。「平和な世界になるように」という願いだけでなく、「私たちは平和な世界を作ることができる」という主体的で強い信念が基にあるのだと感じました。

しかし、私自身は、このインターンシップで世界が抱える課題の重さを目の当たりにし、「本当に私たちは平和を実現できるのか」という疑問が生じてしまったのです。そして、自分は心から世界の平和を望んでいても、平和の実現を信じていなかったということに気づきました。小さな意識の違いかもしれません。しかし、平和を願うのではなく、私たちは平和を実現できると信じる如果能够できれば、大きな変化をもたらすことができると思います。私はこのインターンシップで、「信じることが行動、そして実現に繋がる。」ということを学びました。そしてこの経験を通して、「信じることは生きる源」という歌詞の意味を改めて知ることができました

この気づきを、私は日常生活にも生かしていきたいです。今まで私は、何かを始める前から色々な心配や悩みを多く抱えていました。しかし、挑戦しようと思ったことや自分の目標に対して、まずはその実現を信じてみる。そして実際に必要なことを少しずつ積み重ねていく。そ

・学生ボランティアグループの活動

のように、悩みではなく、達成したい目標自体に向き合おうと思いました。

このインターンシップの中で、私は良い言葉にも出会いました。それは、
「わたしたちは、貧困を終わらせる最初の世代になることができるかもしれません。同時に、地球を救うチャンスがある最後の世代になるかもしれません。」という言葉です。

2015年に国連総会では「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が全会一致で採択されました。この文章は、そのアジェンダの宣言部分、50パラグラフ目に記載されているものです。

また、新約聖書マルコによる福音書11章22節～24節には次のように書かれています。

そこで、イエスは言われた。「神を信じなさい。はっきり言うておく。だれでもこの山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言い、少しも疑わず、自分の言う通りになると信じるならば、そのとおりになる。だから、言うておく。祈り求めるものは全て既に得られたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになる。」

「私たちは、貧困を終わらせる最初の世代になることができる。」と一人一人が疑わず、信じることができれば、きっとその通りになり、平和は実現するでしょう。



【アンネのバラ植樹記念礼拝】11月19日（火）緑園チャペル

奨励 音楽芸術学科3年

本日、奨励を務めさせていただく音楽学部3年の梅本彩希です。今までアンネバラ礼拝には奏楽として参加させていただいていました。今回は初めて奨励を務めます。



フェリスのアンネのバラは、一時枯れそうになりながらも、職員さんや学生の努力もあり今年もたくさんの花をつけてくれました。今年になって気が付いたのですが、花が綺麗なことはもちろん、散った花びらを触ってみるとシルクのような触り心地がします。よかったら手に取ってみてください。

今回の聖書朗読の箇所は、

「今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ神はこのような装ってくださる」とあります。

じっと一つ一つのアンネのバラの花を見てみると、蕾の時は赤、開花後に黄金色、サーモンピンク、そして赤へ変色する特徴があります。これは、もし生き延びる事ができたなら、多くの可能性を秘めていたアンネを表現しているそうです。薔薇の花は冬になると花はもちろん葉も全て落ちてしまいます。それでも次の年には変わらず美しく咲く様子には、何気ない日常の中で彩りを与えてくれます。

アンネは、過酷な状況の中、決して希望を無くすことなく生き抜きました。日記を書いていた頃、恵まれた環境とは決していえないアンネでしたが、今もこうして多くの人に受け継がれ、多くの人々の心を動かし続けています。

さて、私はこのフェリス女学院大学で音楽を学んでいます。本日は、音楽を通した周りの環境への感謝についてお話させていただきます。

私は今まで、音楽を学ぶならやはり本場の海外が最適だと考えていました。クラシック音楽の起源であり、多くの著名な作曲家や楽団が生まれた地であるヨーロッパでは、歴史ある音楽教育が整っており、深い伝統の中で学ぶことで、豊かな音楽性が身に付くと信じていたのです。また、現地の教会やホールでの演奏、現地の音楽文化との触れ合いを通じて、より本格的な技術や表現力を磨けると考え、憧れを抱いていました。音楽の本場はやはり海外に出なければ！音楽を学ぶのなら一度は海外に行くべきだ、と考えていたのです。しかし、音楽の教員免許取得の勉強をしたり、ボランティアでの地域の演奏活動を通して、そうとも限らないと気づきました。授業実習のため、教科書に載っている日本音楽の背景や素晴らしさを知る中で、日本独自の美しさに気づきました。また、地域の方に演奏をするとき、そろそろ紅葉が始まったから、「もみじ」を演奏しようかな。なんて考えるのが楽しく感じます。それと同時に自然の美しさや日本の音楽の素晴らしさを感じます。

・学生ボランティアグループの活動

日本の音楽は、その多様性と深みを持ち、私たちの心に響く素晴らしい文化の一つです。日本に生まれ、日本で育つことで、この豊かな音楽文化に自然に触れられることは本当に幸せなことだと感じます。伝統的な和楽器の音色や民謡から、現代のポップス、ロック、アニメソング、さらにはクラシックの分野にまで、日本の音楽は独自の美しさと個性を持ち、多くの人々を魅了しています。例えば、尺八や三味線、琴などの伝統楽器が奏でる音は、他国の音楽では味わえない深い情緒や静けさを感じさせます。これらの音楽は、日本の自然や四季折々の風景と強く結びついており、特に春の桜や秋の紅葉とともに聴くと、心が洗われるような感覚を覚えます。また、日本の民謡には、地域ごとに異なるリズムや旋律があり、それらはその土地に住む人々の暮らしや歴史を感じさせてくれます。こうした音楽に触れることで、自分自身が日本の歴史や風土の一部であることを実感し、感謝の心を感じます。

さらに、現代の J-POP やアニメソングなども、日本独自の音楽文化として世界中で人気を博しています。特にアニメソングは、日本のアニメとともに多くの国々で愛され、ファンを楽しませてくれます。このような音楽が国境を超え、共感を生み出すのを見ると、日本人として誇らしく感じると同時に、こうした音楽が日常的に聴ける環境にあることをありがたく思います。また、日本の音楽教育も幼少期から豊かな体験を提供してくれます。学校の音楽の授業で合唱や楽器演奏を学ぶ機会を通して、音楽に親しみ、仲間と一緒に作り上げる喜びや一体感を感じることができました。こうした経験は、ただ音楽を楽しむだけでなく、他者と共に何かを築く大切さも教えてくれました。

こうして振り返ると、日本に生まれたことで、世界でもユニークな音楽に自然に触れられる環境にいることを本当にありがたく思います。音楽を通して日本の文化や風土、そして他者とつながる喜びを感じられることは、日本人に生まれたからこその特権だと感じます。もちろん海外で音楽を学ぶことはとても素晴らしいことです。また、最近のグローバル社会において、世界へと目を向けることも確かに重要です。しかし、その前にまず自国や身近な環境を深く理解し、その素晴らしさに気づき感謝することが大切だと思います。自国の文化、歴史、そして身の回りの現実を知ることによって、自分のアイデンティティが確立され、強い土台が築かれるからです。自分が何を大切にし、どのような考えを持つかが明確になって初めて、他国の文化や価値観としっかり向き合うことができるのです。自分の強みや独自性を知り、それを活かしながらその先のより広いところへ行くことで、より効果的なつながりが築けると思います。

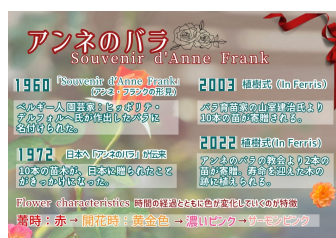
まずは、身の回りの人々や環境に感謝することが大切です。日常にある小さな支えや恵みに目を向け、それに感謝することで、自分の存在が多くの人や出来事に支えられていると気づきます。この感謝の気持ちが、さらに大きな挑戦や新しい出会いにも向かう力となり、その先へ進んでいくための確かな基盤を築くのです。

3) アンネのバラ花壇看板デザインコンテスト

アンネのバラの花壇に立つ看板の劣化に伴い、リニューアルをする機会を活用して、看板のデザインを学生にしてもらうことになりました。学内でデザインを募り、7つの作品が提出されました。ボランティアセンター運営委員・職員、学生スタッフによる投票と、アンネのバラ園芸チームの審査により順位付けをしました。その結果、音楽芸術学科1年生の作品が1位となり、新看板のデザインに決定しました。12月4日(水)にはアンネバラ花壇の前で授賞式を行いました。知足センター長より、上位3名の受賞者へ賞品が、4位以下の学生へは参加賞が贈呈されました。



新看板に決定！



新看板：2025年1月30日(木)に設置

・ NPO インターンシッププログラム

NPO インターンシップは、NPO 法人アクションポート横浜（市民活動支援 NPO）の実施事業で、横浜近隣地域の NPO で大学生がインターンシップを行い、地域貢献を通して学生が成長する場を提供しているプログラムです。活動先は、「福祉」「国際協力」「子育て支援」「環境」「まちづくり」など多岐にわたります。

神奈川県下を中心に、明治学院大学、桜美林大学、横浜商科大学、横浜市立大学、神奈川大学、専修大学、関東学院大学、東海大学、フェリス学院大学が授業や課外活動の一環として参加している他、一般学生の受け入れも行っています。今年度修了生は、プログラム全体では長期 14 名、短期 45 名、フェリスからは下記のように 6 名の学生を派遣しました。受け入れ団体は約 23 団体。

短期体験コース 10 日間（80 時間程度）体験を目的。研修生として位置付け

長期実践コース 3～6 カ月程度（200～400 時間程度）週 1，2 回（長期休みは週 3 日程度）
課題発見・解決、プロジェクトの実施等スタッフとして位置付け

< 派遣学生 >

短期：国際協力 NGO Act for Child	国際交流学科 1 年	1 名
	国際交流学科 2 年	1 名
リロード	国際交流学科 2 年	1 名
	国際交流学科 3 年	1 名
NPO 法人横浜 NGO ネットワーク	国際交流学科 1 年	1 名
障害者自立生活センターIL・NEXT	音楽研究科 1 年	1 名
長期：認定 NPO 法人 アークシップ	音楽芸術学科 2 年	1 名
NPO 法人横浜 NGO ネットワーク	国際交流学科 3 年	1 名

全体の活動スケジュール

活動	日程
（学内での説明会）	4 月 22 日（月）昼 オンラインにて実施
募集説明会	5 月 16 日（木）19:00-20:00 オンラインにて実施
学生と NPO の相談会 大学と NPO の情報交換会	6 月 1 日（土）@横浜市立大学金沢八景キャンパス
学生と NPO の面接	6 月 17 日～7 月 3 日 対面・オンライン
事前研修会	7 月 6 日（土）@横浜商科大学つるみキャンパス
（短期）成果報告会	10 月 26 日（土）@明治学院大学横浜キャンパス
（長期）成果報告会	2 月 26 日（水）@横浜開港記念会館

【短期インターンシップ生・参加報告】

最終報告会での各インターン生による発表内容の抜粋です。

インターン先：障害者自立生活センター IL・NEXT

【感想】

肢体不自由の方と接するのは初めての経験だったので、触れ合っている中で皆さんの日常を知ると同時に健常者である私と何も変わらないとを感じるようになりました。同じ場所で生きていて、お話をして、笑いあって、楽しんで、できることは自分でして、難しいことは手伝ってもらおう。むしろ体が不自由であるからこそ、しょうがいを持っている人の方が社会的な well-being のために必要なことを日常的に感じているように思いました。夏祭りにも参加させていただきました。会員の皆さんがほとんど自分たち主体で開催しており、誰でも楽しめるように工夫しているのを横からお手伝いすることができてとても楽しかったです。

【インターンシップを通して変わったこと】

しょうがいを持っている人は生きるだけで大変な思いをしているだろうからやさしくしないと、と思っていました。今思うと、無意識下で「助けてあげる」という傲慢な考えを持っていたと感じます。代表の方が、「僕はしょうがいを持って生まれてきたけど、生まれてから一回も不幸だと思ったことはない」という言葉が印象に残りました。

【団体へのメッセージ】

しょうがいについての理解を深めると共に、自身の中にあった「しょうがいを持っている人はどんなふうに住生活しているのか」「どのように生きてきたのか」「災害がある時にしょうがいがある人とどんなふうに住すればよいのか」という疑問の答えを知ることができました。しょうがいについての歴史や法律などの知識も教えてくださりありがとうございました。

インターン先：横浜 NGO ネットワーク

【感想】

大学の授業だけでは学べない、SDGs の問題に自主的に着眼し追求する機会だったので楽しく活動することができた。横浜 NGO ネットワークでは、自由に学び活動できる場という点の特徴であり、とても自分に合った環境で参加することができた。またインターンシップ先担当者の方があらゆる経験談やニュース、現在も横浜でなされている取り組みなどを教えてくださり、SDGs を自分ごととしてより身近に感じる事ができた。2 回程イベントにも参加したが、その時に初めて一般の方にとっての SDGs の捉え方や関心度を目の当たりにし、あらためて SDGs の重要性を感じた。

【インターンシップを通して変わったこと】

以前より SDGs について関心が深まり、さらに追求したいという考えを持った点が、一番自分の中で変わったことである。以前は SDGs で一括りにされた 17 の目標全体になんとも興味があるというように広く浅く持っていた関心が、今では 17 目標の背景にある多くの問題、そしてそれらが思いがけない部分で繋がっていることを知り、さらに深くなった。

【団体へのメッセージ】

自由に活動する環境を作ってくださり、とても楽しく取り組むことができました。自分が交流会の主催者側になるということで、その過程では初めての作業が多くあり、難航することが多々ありましたが、自分のペースで進めることを見守ってくださったお蔭で自分でもスキルを上げることができたと感じています。

インターン先：Act for Child

【感想】

ミャンマー北東部シャン州の少数民族パオ族の子どもたちへの教育支援に関連した知識だけではなく、ミャンマーという国自体に対する理解を深めることができる機会があったことが良かった。フェアトレード品の品質管理や値札付けに実際に携われたことで、自分たちが手間暇かけて作業をした商品に対する愛着がわき、作業が楽しかった。

【インターンシップを通して変わったこと】

「本当の支援とは何か」というお話が印象に残っている。支援は先進国が発展途上国に対して一方的に行うものではなく、被支援国の歴史や文化、宗教を学んだ上で行うべきものであるという言葉は確実に私の支援に対する考えを大きく変えたものであると思う。ミャンマーで現在起きているクーデターだけでなく、世界で今この瞬間に起きているすべての問題は同じ地球に住む一人として見過ごすことが出来る問題ではなく、それらの問題に対して「自分には何が出来るのだろう」と主体的に考え、必要なことを学び、そして行動することが大切であることがわかった。

【団体へのメッセージ】

特に印象に残っているのは、「地球市民」という言葉です。日本に住んでいると日々の生活の忙しさを理由に世界に起きている出来事、自分たちの生活と直接関わりのある政治等からも目を背けてしまいがちです。今回のインターンで、いかに私たちが地球市民として協力しあうことが大切かを学ぶことが出来ました。

インターン先：Act for Child

【感想】

国際協力というのは「国籍や宗教などに関係なく、全世界は一つの国として他の地域の子どもや人々を支援する行動である」ということがわかった。ボランティアはただの自己満足ではなく、相手の考えやニーズを大事にして支援すること、あるいは相手をケアすることであるということもわかった。ミャンマーの勉強会では、ミャンマーについての歴史や文化、習慣などについて調べてプレゼンテーションしたり、フェアトレード商品の値付けや整理などが多かった。自分自身はミャンマー人であるが、自分の国について当たり前だと思っていることは、外国人から見ると違う点があることや、自分の国のことでもわからないことがたくさんあることに気づいた。

【インターンシップを通して変わったこと】

最初は不安や緊張したことが相当あったが、実際に活動してみるととても優しい環境であっ

て、毎週ミャンマー勉強会の発表スライドを作ることや情報を探すなどのスキルがアップした。

インターン先：リロード

【感想】

リロードは横浜市で青少年のために活動している団体で、今回は「中・高校生の学習支援」と「地域青少年の居場所運営」の活動をさせていただきました。地域の生徒たちと一緒に勉強し、どんな悩みを持っているのか知ることができました。勉強や将来、友だち問題など共通する悩みを持っていることがわかり、同じ悩みを経験した先輩としてうまく相談にのれたと思います。

【インターンシップを通して変わったこと】

よいイベントをしても広告がうまくいかなくて苦労する姿が見られた。イベントの内容も大事だがたくさんの人たちが来られるためにはどんな方法が必要なのか考えるようになった。

【団体へのメッセージ】

NPO はどんな役割でどんな活動をしているのか学ぶ機会になった。

インターン先：リロード

【感想】

インターンを始めるまでバイトなどの社会経験がなかったため、同世代のインターン生や大人の職員の方と交流したことにより、同じ大学生であるインターン生と自分との違う意見を知ることによって、そこから新しいことを発見することが出来たり、将来社会に出た時に必要になってくるビジネススキルを身に着けることができた。

【インターンシップを通して変わったこと】

始まる前の私は基本的に受け身の立ち回りであることが多く、トラブルに巻き込まれることが嫌だったため、なんでも相手基準で物事を決定することが多かったが、同世代のインターン生や大人との交流を経て、何かアクションを起こすにあたってトラブルはつきものであるということを実感し、先にマイナスのことをなるべく考えず、積極的に意見を発言するなど自分の意思を相手に伝えるチカラが少し強くなったように感じた。

・国際機関実務体験プログラム

公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）を通じて横浜国際協力センターに入居している国際機関・YOKE で実務体験を行います。横浜市内 6 大学（神奈川大学、國學院大學、明治学院大学、横浜市立大学、横浜国立大学、フェリス学院大学）が参加しています。

受入国際機関は、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC）、国際熱帯木材機関（ITTO）、国連食糧農業機関（FAO）駐日連絡事務所、シティネット横浜プロジェクトオフィス、特定非営利活動法人 国連世界食糧計画 WFP 協会、独立行政法人国際協力推進機構横浜国際センター（JICA 横浜）、YOKE です。

今年度のフェリスからの派遣状況は以下の通りです。

派遣内容

夏期：JICA 横浜

2024 年 8 月 20 日～9 月 13 日

英語英米文学科 1 年 1 名

春期：IUC アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

2025 年 2 月 3 日～3 月 7 日

音楽研究科 1 年 1 名

説明会の実施

日時：11 月 20 日（水）12 時 15 分～12 時 45 分

11 月 22 日（金）12 時 45 分～13 時 15 分

11 月 26 日（火）12 時 15 分～12 時 45 分

11 月 27 日（水）12 時 45 分～13 時 15 分

場所：オンライン（Zoom）

内容：横浜市国際交流協会（YOKE）の担当者による説明会

報告会の実施

夏期報告会：9 月 27 日（金）10 時～12 時

春期報告会：3 月 26 日（水）14 時～16 時

・学習支援ボランティア

近隣小学校からの募集に応える形で始まった学習支援ボランティア活動は、年々そのニーズが高まっています。今年度は以下の活動が行われました。

横浜市立本宿小学校	英語英米文学科 4 年 1 名
横浜市立鶴ヶ峯小学校	国際交流学科 2 年 1 名 日本語日本文学科 2 年 1 名 音楽芸術学科 2 年 1 名
藤沢市立湘南台小学校	国際交流学科 1 年 1 名 国際交流学科 2 年 1 名

振り返り会

前期	7 月 5 日（金）	参加者 3 名
後期	12 月 16 日（月）	参加者 2 名

【振り返り会記録】

活動を通して学んだこと

- ・教員を目指す上で、どうやって生徒と関わっていくか、授業の構成などを学べる。
- ・職員室に入ることが出来るのは貴重な経験だと思います。私がボランティア活動をさせていただいた小学校では、生徒第一に、熱心に、愛情深く生徒と接するために、先生方が連携をとって協力している様子を肌で感じる事が出来ました。学校は教育を施す以前に、命を預かっている場所だと痛感しました。私も本当にいろいろな人に大切にされて、守られてきたんだなと感じます。
- ・1 対 1 での勉強の教え方だけでなく、子どもたちに対しての声かけの仕方

活動を通して良かった出来事、経験

- ・だんだんクラスの子が自分のことを覚えてくれて話しかけてくれた時にすごく嬉しかった。
- ・私自身、小学校中学校と勉強が大の苦手で、授業では疎外感を感じることがよくありました。しかし、ボランティアとして教室に入っていると、勉強が大の苦手だった私にしかできないサポートの仕方、声のかけ方があると気づきました。自分の経験を活かして良かったと思います。また、私がボランティアをしている時期はちょうど卒業式の時期だったのですが、たまたま 2 年生の教室におじゃまさせていただくことが多く、6 年生に贈る歌の練習にも参加させてもらいました。6 年生を思って 2 年生のまだまだ身体の小さい子たちが、全身を使って歌っている様子を見て、涙が出てしまいそうになりました。また、授業中に分からない問題にぶつかっても、諦めない姿に感動しました。子どもの成長って、本当にどんなに些細な事でも、尊いと思

・学習支援ボランティア

います。そういう子どもたちの素直な姿が見られる小学校はとても素敵な場所だなと感じました。

- ・先生の目線ではあるが、子どもたちと一緒に色々な活動、経験ができること
(歴史博物館の校外学習や宿泊学習に同行しました)
- ・常に子供たちが成長している場面に遭遇できること
(例えば1年生。支度が早く終わり、先週のこの時間よりも読書に移行できてる子が増えているなど)
- ・先生の目線で物事を見る練習になっている。目指している、目標としている校種とは違うが声かけの方法や1人1人の対応の仕方など勉強になっている。
- ・常に成長している場面に出会えるという点から小学校教員もいいなと感じ、視野に入れるようになった。幅が広がった気がする。
- ・ボランティアセンターがあったおかげで学習支援ボランティアに参加出来ています。サポートをたくさんしてもらえてとてもありがたいです。いつもありがとうございます！
- ・素敵な機会を与えてくださって、ありがとうございます。

以下、常時募集を行っています。

1) 小学校

【横浜市立本宿小学校】学習支援ボランティア

活動日時	応相談	対象	1～6年生の一般学級または個別支援学級
活動内容	授業中に教室の中で学習支援障がいのある児童に対する学習や学校生活の支援や希望者には校外学習の付き添い	場所	相鉄線「鶴ヶ峰駅」から徒歩12分 交通費支給あり、保険は小学校にて加入

【横浜市立鶴ヶ峰小学校】特別支援教育支援員または子どもの学び支援ボランティア

活動日時	週に1日程度。一回につき2時間程度、あるいは半日、あるいは6時間程度	対象	1～6年生の一般学級または個別支援学級
活動内容	個別学習支援、個別支援級補助、一般学級補助等個に応じた学習の支援(算数、国語等)	場所	相鉄線「鶴ヶ峰駅」から徒歩7分 1回につき1,000円程度報酬あり 交通費支給(上限800円)、保険は小学校にて加入

【藤沢市立湘南台小学校】学習支援(特別支援学級、国際教室)ボランティア

活動日時	(1)特別支援級: 授業期間中の授業時間内(8:30～15:15) (2)国際教室: 8:30～17:00	対象	1～6年生
活動内容	特別支援級および国際教室在籍児童の学習支援	場所	「湘南台駅」(小田急線・相鉄線・横浜市営地下鉄)徒歩10分 交通費の支給はなし、給食は希望があれば無料。保険なし。

・学習支援ボランティア

【横浜市立坂本小学校】学習支援（特別支援学級、国際教室）ボランティア

活動日時	応相談	対象	1～6年生
活動内容	授業中に教室の中で学習支援障がいのある児童に対する学習や学校生活の支援や希望者には校外学習の付き添い	場所	相鉄線「上星川駅」から徒歩5分 交通費1000円/回の支給あり、保険は小学校にて加入

2) 中学校

【横浜市立岡津中学校】学習支援サポーター

活動日時	毎週水曜日 14時半頃～（50分程度）	対象	中学校1～3年生まで
活動内容	学習サポート	場所	いずみ野線「緑園都市駅」から徒歩20分

【横浜市立旭中学校】教育活動支援

活動日時	週に1日程度。曜日は応相談	対象	中学校1～3年生まで
活動内容	(1)保健体育科は水泳授業のプール内の監視活動 (2)希望があれば、来校できる日の教育活動補佐 (3)個別支援学級は、教育活動補佐(通年で来校できる曜日)	場所	相鉄線「二俣川駅」からバス10分

4) 子ども食堂

【コミュニティだんだん 学習応援子ども食堂】 場所の都合で人数制限があります。

活動日時	毎週水曜日 15時～19時頃	対象	学習を希望する小学生と中学生
活動内容	子どもたちが宿題や課題をもってくるのでそのお手伝い、一緒に遊ぶ 食事の準備	場所	いずみ野線「弥生台駅」から徒歩5分

学生による活動報告

NPO インターンに参加して

国際交流学科 2 年

「特定非営利活動法人リロード」(以下、リロード)は子供、若者の支援を通じて様々な人が共生する社会づくりに取り組む団体である。主に神奈川県青少年者を対象としたこの団体では、生活に不安を抱える子どもや若者の自立をサポートする事業を行っている。今回私は NPO 法人アクションポート横浜の NPO インターンシッププログラムを通して大学生インターン生としてこの団体の活動に参加することにした。

ボランティア活動は学生時代から興味があり、高校時代にも約 1 年間、月に 2 回の頻度のボランティア活動をした経験がある。定期的に参加したボランティア活動以外にも短期で市立の図書館の運営の手伝いや障害者のイベントのスタッフとしてボランティア活動をした経験もある。その活動を未熟な自分でも社会のために何かしらの貢献ができるという達成感をもらうことができた。それだけではなく、普段の生活では交流することができない多彩な方々との出会いができることはもちろん、学校の先生や周りの親戚以外の大人たちとの交流を通して、考えの視野が広がることを経験したことがあったから、ボランティア活動を続けたいと思った。

しかし大学に入ってから授業外の色々な活動で多忙だったので、あまりボランティア活動ができる時間が作られず苦労したが、今回参加した NPO 団体のインターンシップは夏休み期間に参加できることが魅力的に感じた。そして学校を通して参加できる活動の一つだったので、活動内容にも、開催する団体にも信頼ができることが気に入った。また、将来に NPO 団体の就職も考えているので、今回の活動を通して実際に NPO 団体はどんな活動をしているのかについて学べる大事な機会だと考えた。

海外から留学生として日本に来た私は、できるかぎり色々な人との交流を求めているが、学校やアルバイト先以外に日本人との交流の機会が少ないことに気づいた。そこで、多彩な世代の日本人との交流を通して彼らが生活の中でどんな悩みを持っているのか知りたいと思ったので、地域の住民たちと関わりがある活動ができるリロードでの活動を選んだ。今回はリロードの活動の中で「寄り添い型学習支援事業(以下、学習支援)」と「青少年の地域活動拠点ハッピースクエア(以下、ハピスク)」を中心に参加することになった。

「学習支援」とは、横浜市のある区の様々な事情がある中学生・高校生を対象とした活動である。基本的には学生たちの自習を隣で手伝うことである。学習支援という名前通りに勉強を教える塾の先生のような活動がメインになると考えられるが、実際には学生たちが勉強をあきらめずに続けるように手伝うことがメインである。学生たちは家族と先生以外の大人と友達のように冗談をしたり、洋服をほめたりするなどコミュニケーションを通して自分に興味を持ってくれる人たちがいることを気づく機会にもなる。

ここでの活動は「勉強を助ける」という表面的なメインの目標があり、自分の知識に不安をもってだれかに何かを教えることができるか苦労しながら活動に参加した。予定した通りに、国語と理系が母国で学んだ内容も違う上に用語も難しいもの多くて、教えることが不可能であった。むしろ学生に間違えた情報を教えるのではないかと心配しすぎ、結局的に自分も自信を

もって教えることができる数学や英語を担当することが中心になってしまった。

しかしこのような私の姿が、学生たちの立場では、今までボランティアとして来てくれた他の大学生と比べると異なるイメージだったので「大学生になっても知らないものがあるんだ」と認識し、親しいイメージが作られ短い時間の中で急速に学生たちと仲良くなる機会になったと感じた。また、お互いに知らない部分は教科書と教材を使いながら一緒に調べることで、周りに勉強を助ける人がなくても一人で自習できる習慣をつけることができたと思う。そして、学生たちが特技の科目を勉強する時には、「先生(インターン生)に、今日学んだ内容を説明してくれない？私はあまり知らない科目だから」と声をかけることで、学生たちの復習はもちろん自己肯定感を高める機会にもなったと考える。

このような活動が終わって学生たちが帰った後には、活動に参加する人たちが集まって今日は学生がどんな勉強をしたのか、話の中で気になる話題はなかったのか共有する時間があった。ただのボランティアや塾の先生だったら、ただ知識を教えるぐらいで終わったかも知れないがこの共有を通して学生たちの学校生活や日常生活の中での悩みを共有し、それを解決するための方法をお互いに考える機会になった。

続いて「ハピスク」とは、地域の中高生が気軽に訪ねることができる体験・交流の場所の一つで、リロードでは横浜市の支援を通して、横浜市のある区でその事業を行っていた。その区の中高生が住んでいる地域での積極的な活動を求めている、学習支援とは違ってその区の中高生ならだれでも参加できる場所である。この場所では、友達とのおしゃべりや勉強会、無料のボードゲームを楽しめることができる。その他にもボランティア活動の情報の発信やミニイベントなどが行われる。

ハピスクでの活動は、訪問する学生たちの対応はもちろんイベントの企画などの運営の活動もあった。主な目標はどうやったら地域の学生たちが訪問するようになるかについてだった。ハピスクは近所の中・高校とは少し距離があり、普段訪問する学生たちは近所に住んでいる学生に限られていた。学生たちの地域活動を応援する場所だったので、その目的性としては問題がなかったが、認知度の問題か新しい学生たちが増えないことが問題だった。

インターン生たちはハピスクの運営を手伝うこと以外にも新しい学生が来られるようにするというメインの目標を設定して、その他にも1回訪問した学生たちが引き続き尋ねるようなイベントの企画も始めた。そこで実際にインターン生たちが企画の段階から参加したイベントは「ミュージックデー」「ショーケース」「未来のわたしへ」というイベントだった。

「ミュージックデー」では、ハピスクに来る学生たちがお互いに好きな曲をお勧めして流れることで知らない人との共通点を作ることを目指した。また、思い出の曲を聞きながらコミュニケーションの機会に繋がることを期待した。毎日流れるクラシックではなく、多彩な曲を流すことでいつもと違う雰囲気を作ることができたと考える。しかしイベントの当日では広告が足りなかったので参加する学生が少なかった。そこで、私たちは楽しそうなイベントを企画するだけでは足りないということを学んだ。

「ショーケース」では、ミュージックデーと同じく、知らない人との共通点を見つけることでお互いに仲良くなることを目標にした。各自で好きなグッズを置いて紹介するいわゆる押し活の一つでコミュニケーションが苦手な人も知らない人との共通点を見つけることでお互い

・学生による活動報告（NPO インターンシップ）

に仲良くなることを目指した。用意したものはハピスクの外でも見られるように飾ることで、近所の人たちにもこのようなイベントをしているとアピールすることができたし、興味を持って訪問する学生もあった。

「未来のわたしへ」では、自分への手紙を書くことで今の気持ちや悩み、感情を振り返る機会を作ることを目標にした。タイムカプセルの小さいバージョンで、3カ月の自分に向けて手紙を書くイベントだった。手紙を書く際に必要な封筒やレター紙はハピスクにある色紙を使って学生たちと一緒に折り紙で作った。最初に参加を促進するためにインターン生がサンプルで手紙を書いて貼っておいたが、それがよい影響を与え結構多めの手紙をもらうことができた。

普段のボランティア活動だったらただイベントに参加して手伝いするだけで終わってしまうことが多いが、今回のインターン活動を通して企画からイベントに参加することは大切な経験になった。特に「なぜこのイベントをするのか」「このイベントを通して、参加者は何が得られるのか」「どうやってこのようなイベントを広告するのか」などを考えることで、単なる参加者としての役割を超えた学びが得られた。

また、今回の学びを通して地域の中高生と接することで、彼らがどんな悩みを持っているのか知り、どんな支援が必要なのか考えるようになった。そして NPO 団体が身近な場所で色々な事業を行っていることを知り、地域の行政活動について積極的に興味をもって参加していきたいと思った。

障害者自立生活センターIL・NEXT でのインターンシップ

音楽研究科 1 年

参加したきっかけと活動内容

きっかけは、自身に障がいをもつ友人がいるためです。NPO の活動の中で障がいを持つ人がどのように日常を過ごしていて、非常時にはどのように対応されているのかに興味があり、参加させていただきました。

活動内容は、インターンシップ先である障害者自立生活センターの皆様が、私たちインターン生のためにインターンシッププログラムを作ってくださいました。具体的なスケジュールは以下に記載いたします。

11 時 障害者自立生活センターIL・NEXT 前集合

12 時まで 会員さんとお話、障がいについて学ぶ

13 時まで 会員さんと近くのコンビニへお昼を買いに行く、お昼

16 時まで 障がいについて学ぶ（DVD 鑑賞、生い立ちを聞く）、災害時について Zoom で伺う、夏祭りに参加

17 時まで ラジオ体操、帰りの会、会員さんのお見送り、解散

参加目的と目的の達成度

NPO で活動されている人や会員さんがどのような生活を送っているのか、地震や火事などの非常事態にさらされた時にどのような対応をすればよいのか、どのように生きてきたのかなどを知ることを目的として参加しました。このインターンシップのプログラムを通してこの目的を達成することができたと考えています。

活動において新たに発見したこと

障がいを持つ人は所謂健常者と呼ばれている人よりも多くのことを見ているという事が分かりました。具体的には、いつも使用している駅でもエレベーターの場所を知らなかったことに初めて気が付きました。また、バスに乗る際にはノンステップバスにしか乗ることができないという事も初めて知りました。関わることで今まで気が付かなかったことが見えるようになったと感じました。

この体験をふまえ、今後何をしたいか

このインターンシップに参加する前は NPO がこんなにも幅広い対象者や目的を持っているとは知らなかったもので、これからは団体ごとに何をしているのかを理解したうえで参加していきたいと感じました。また、街中で障がいを持つ人と出会った時に「困ってそうだな」と感じたら、ためらわずに声をかけられるようにになりたいです。

・学生による活動報告（NPO インターンシップ）

参加したインターンシップに対して、改善点や今後への提案

ボランティア活動に興味があっても自分の予定と合わないかもしれないから遠慮した方がよいかもしれない、と考えてしまう方もいると思います。このインターンシップでは受け入れ先の NPO と自身の予定を合わせて活動に参加することができるため、期間や時間が決まっているボランティアよりも参加しやすいのではないかと考えました。そのことをインターンシップに参加する前から知ることができれば、参加者が増えるのではないかと感じました。また、活動内容や集合時間などを予め知ることができれば、参加のハードルをさらに下げることができるのではないかと考えます。

全体的な感想、コメント

障がいを持つ方と 10 日間共に過ごすことで、普段何気なく使用している公共交通機関の不便な点や工夫されている点について知ることができました。また、障がいを持っていると苦労しなくてよいことで苦労してしまって大変そうだな、と感じていた部分がありましたが、障がいがある方自身が「僕はこの身体で生まれてきて、不幸せだと思ったことは一度もない」と語っていたのを聞いて、無意識な心配や決めつけは良くないと強く感じました。価値観や考え方は人それぞれで、そこに障がいの有無は関係ないと感じさせられた出来事でした。この活動を通して、障がいについて知るだけでなく、人として成長することができたと感じています。

視野を広げたい方、人と関わりたい方、成長したい方へ是非おすすめしたいインターンシップです。

活動報告書

国際交流学科 3 年

なぜボランティア活動を行ったか

私がボランティア活動を行った経緯として、高校生の頃から社会問題に関心があり、当時コロナの影響でボランティアなどに参加することが出来ず、何度も機会を逃してしまっていたが、大学生活を送っているなかで、大学のボランティアセンターの掲示で NPO インターンの募集をしていることを知り、この NPO インターンを通して高校生の当時から考えていた現場の実際の状況はどうなっているのかを自分の目で見つめ、自分にはどんなことが出来るのかを確かめたい、また NPO インターンを経て、実際に自分自身が社会に出た時に必要なビジネススキルを身につけ、また現場の活動において自分に足りないスキルを発見していきたいと思い、ボランティア活動を行った。

当初の自分の目的を達成したか

私が活動した NPO インターン先は中学・高校生世代の青少年を対象とした学習支援を行うことが目的となっており、今回この NPO インターンに参加するにあたっての自分の目標として「子どもたちと積極的に関わる」「自分が主体となった企画を計画し、実行する」ということを目標に掲げていた。1 つ目の「子どもたちと積極的に関わる」という目標は、中学・高校生世代の青少年を対象としているが、その中でも生活保護世帯・生活困窮者自立支援制度利用世帯・児童扶養手当対象世帯の生徒が対象となっていたため、子どもたちと会話するにあたって、どこまで私生活などの話に踏み込んでいいのかという加減に悩んでしまい、また自分の人見知りという部分が出てしまい、積極的にお話することが難しく、あまり実行できなかったため、目標達成とは残念ながらなかった。しかし、「学習支援をする」という面に関しては、子どもの手が止まっているなど感じたら声を掛け、子どもの現状を確認し、どうやったらそこから進めるかアドバイスをすることができた。2 つ目の「自分が主体となった企画を計画し、実行する」という目標は、学習支援をメインに行っている場所とは別に、もう一つのインターン活動場所であったところで行うことができ、まず企画の計画の段階から任せていただき、同じインターン生や活動場所の職員の方にアドバイスをもらって改善をし、企画宣伝のためのポスター作りなどを行ったり、企画日当日も自分自身が主体となって運営することが出来たため、当初設定した目標よりもはるかに達成度を感じることが出来た目標だった。

活動において発見したことは何か

今回の中学・高校生を対象とした学習支援活動の NPO インターンを通して発見したことは、主に 3 つある。まず一つ目は、学習の進み具合において、理解の差が単に知識量の違いだけでなく、学習方法の違いにも起因していることを実感した。多くの子どもたちは、ただ教科書を読み進めるだけでなく、効果的なノートの取り方や計画的な学習スケジュールの立て方を学ぶことで、格段に成績が向上するのではないかということを感じた。

・ 学生による活動報告（NPO インターンシップ）

二つ目は、生徒たちの学習に対するモチベーションの維持が非常に重要であるということである。一度つまづいてしまったり、成果が見えにくくなると、学習に対する興味や意欲が低下しやすくなる。そのため、学習の進み具合をこまめに確認し、達成感を味わわせることが効果的だと感じた。小さな成功体験が子どもたちの自信を育み、次の段階に進む力を与えてくれるということが発見できた。

最後の三つ目は、学習支援を通じて、個々の生徒のペースやスタイルに応じた指導が求められることを痛感した。一人ひとりの学び方に寄り添うことが、成果を引き出すために最も大切だということが発見できた。

この体験を通して何を得たか

中学・高校生を対象とした学習支援活動を通して、私は教育の奥深さと、個別の指導が持つ重要性を実感した。特に、子ども一人ひとりが抱える学習の課題やモチベーションの差を目の当たりにし、柔軟で多様なアプローチの必要性を強く感じた。最初は普通の授業での知識の定着を目指していたが、個々の理解度や学習スタイルに合わせた指導が効果的であることに気づいた。この経験から、教育には「一律の方法」ではなく、子どもたちの個性やペースを尊重した支援が求められると痛感した。また、子どもたちと向き合う中で、学習のモチベーションの重要性を再認識した。単に知識を教えるだけでなく、学ぶ意欲を引き出すことこそが、学習の本質だと感じた。特に、困難に直面している子どもに対しては、ポジティブなフィードバックや達成感を与えることで、次への意欲を引き出すことができた。さらに、この活動を通じて、私は問題解決力を高めることができました。指導を進める中で、子どもたちとの信頼関係を築くことの大切さを学び、その経験は今後の学びに大いに役立つと感じている。

自己について発見できたか

中学・高校生を対象とした学習支援活動を通じて、自己について多くの発見があった。まず、自分が予想していた以上に「教えること」に対して強い興味と責任感を持っていることに気づいた。初めはそもそもの指導経験が乏しく、どう進めるべきか戸惑うこともあったが、子どもたち一人ひとりの成長をサポートする過程で、学びの楽しさや達成感を感じ、次第に自分の役割の重要性を実感するようになった。この経験は、私にとって単なる「教える側」の立場以上の意義があると気づかせてくれた。また、私自身が他者の反応に敏感であることを再認識した。子どもが理解できていない様子を見て少々焦ったり、自分の説明がうまくいかないと感じることもあったが、その度に冷静に改善策を考え、アプローチを変えることを学んだ。この柔軟性が自分に足りていない部分だと感じ、今後さらに成長すべき課題だと認識した。さらに、私は自分が思っていたよりも「他者をサポートすること」に喜びを感じるタイプであることに気づいた。自分が他者の成長に貢献することで、自己満足感や充実感を得られるという新たな発見があり、この経験は今後のキャリア選択にも影響を与えていると考えている。

この体験をふまえ今後何を行いたい

NPO でのインターンシップを通じて、社会的課題に対する具体的な解決策を実践的に学び、

・ 学生による活動報告（NPO インターンシップ）

私の将来の進路に対する考え方が変わった。特に、限られた情報の中でどのように効果的な支援を提供するか、そしてそれを持続可能な形で実現するかという点に深い関心を持つようになった。この体験を踏まえて、今後は社会貢献を中心にキャリアを築いていきたいと考えている。まず、NPO 活動を通じて得た「現場での課題解決力」をさらに高めるために、社会福祉学や経済学を深く学び、組織運営や資金調達のスキルを磨きたいと思う。また、地域社会における支援活動を通じて、より多くの人々に实际的な援助を届けられるよう、運営能力を向上させることが重要だと感じている。教育や環境問題など、持続可能な社会作りに向けて、自分がどのように貢献できるのかを模索し、実践していき、社会に対してより広い視野で貢献できるよう、今後も学び続け、成長していきたいと思う。

参加したボランティア活動(又は団体)に関しての提言

中学・高校生を対象とした学習支援活動を通じて、いくつかの提言がある。まず、個別指導を強化することである。主に学習支援の仕方として満遍なく子どもたちに関わるのが重要とされていたが、子どもの理解度や学習スタイルは一人ひとり異なるため、一人に対して必ず一人がつく1:1の関係で、個別の学習プランを提供することで、より効果的な支援が可能になると考える。次に、学習支援だけでなく、メンタルサポートも重要であると感じた。学業のプレッシャーや自己肯定感の低さが学習の障害となることが多いため、さらに心理的なサポートやモチベーションを高めることも重要だと感じた。また、保護者や地域との連携を強化し、家庭や社会全体での支援体制を構築することも大切であるため、これらを実現するためには、ボランティアの教育や研修の充実も重要だと考える。

自己評価

NPO インターンを通して、私は社会的課題に対する理解を深め、実践的な問題解決能力を養うことができた。限られた情報での効率的な支援方法を考える中で、柔軟な思考とチームでの協力の重要性を実感した。特に、現場での実務経験が自分の視野を広げ、社会貢献の意義を再認識する貴重な機会となった。一方で、より効果的なコミュニケーションやリーダーシップを発揮するためのスキル向上が今後の課題である。

国際協力 NGO「Act for Child」でのインターンシップ活動を終えて

国際交流学科 1 年

私は 8 月 10 日から 2 月 22 日まで、約 15 日間という限られた時間ではあったが、国際協力 NGO「Act for Child」のインターンシップに参加した。この団体は、子どもたちに教育の機会を提供し、貧困の連鎖を断ち切ることを目指し、ミャンマー北東部の教育支援や日本国内での平和人材育成、フェアトレード活動を展開している。インターンシップでは、ミャンマー勉強会への参加、フェアトレード品の品質チェックや値札付け、Instagram を活用した SNS 運用などに取り組み、また、2 月 21 日・22 日にかながわ県民センターで開催された「かながわボランティアフェスタ」では運営補助も行った。

そもそも私が NPO インターンシップに関心を持ち、参加を決意したきっかけは、大学入学を機に新しいことに挑戦したいと思ったからだ。それまでボランティア活動の経験はなく、NPO や NGO についても知識はほとんどなかったが、説明会でインターンシップの存在を知り、社会課題の解決に貢献できる点に魅力を感じた。もともと人を助けることに喜びを感じる性格のため、団体の一員として実務に関わり、社会貢献の現場を体験できるこの機会は非常に貴重だと考えた。さらに、大学生活を充実させるためにも学業以外の新しい挑戦をしたいという思いが、参加の決め手となった。

私はこの NPO インターンシップに参加するにあたり、私は 2 つの目標を掲げた。1 つ目は「団体の支援国であるミャンマーについて学び、インターンシップを有意義なものにすること」だ。積極的に学ぶことで活動への理解が深まり、新たな気づきが得られると考えたのだ。2 つ目は「自分の活動が支援にどう繋がるかを正確に把握すること」だ。各業務が支援にどう貢献するかをきちんと理解することで、自分の役割を明確にし、責任を持って取り組むことが重要だと感じた。

これらの目標を踏まえ、インターンシップを通じて得た学びは、大きく分けて 2 つある。1 つ目は「考えることの大切さ」だ。ミャンマーでは 2021 年のクーデター後、若い世代が SNS を駆使し国外へ支援を呼び掛け、国軍に反発しながら未来を模索している。彼らが同世代でありながら命を懸けて行動している事実を知り、私も日々をもっと深く考えながら過ごす必要があると感じ、インターンシップ中にミャンマーについて深く学んだことで、「日本はどうだろう」と自国を客観的に見つめ直すきっかけを得た。例えば、ミャンマーでは村ごとに寺院があり、僧侶が村人のカウンセラー役を担っている。相談内容は人生の重大な決断から日常の夫婦喧嘩まで多岐にわたるそうだ。この話を聞いて、私は、日本では小さな困りごとさえ誰にも相談せず抱え込む現状を思い浮かべた。日本はインフラ整備では進んではいるものの、心のケアはまだ不十分で、多忙な日々の中で自分の気持ちを聞く余裕を持っていない人が多いのではないかと感じた。このように、ミャンマーについて能動的に学ぶだけでなく、現地の話を伺うことで、他国の状況を学ぶ意義は自分の日常に対する視点を変えることだと気付いた。世界の問題に関心しているのではなく、それらが私たちの生活に与える影響を考え、そこから得た学びをどう

・学生による活動報告（NPO インターンシップ・短期）

活用するかが大切だと感じ、また、自分の置かれた環境やその中の課題に目を向け、自己理解を深める重要性を実感することができた。さらに、発展途上国から得られる教訓を通じて、自国への新たな視点や気づきを得ることの意義も強く感じた。2 つ目は「正しい国際支援の在り方」だ。私は前述のように、インターンシップ中に自分の活動がどのように支援に繋がっているのかを常に意識していた。例えば、Instagram での SNS 運用は、Act for Child の活動内容やミャンマーの現状を伝える手段となり、それによって支援の輪を拡大することに繋がる。しかし、代表の伊吾田善行さんのお話を伺ったことで、支援の具体的な内容に加え、どのような視点や心構えで支援を行うのかもまた、重要であるということに気付いた。そのように感じたきっかけとなった出来事は、Act for Child がミャンマー現地で学校を建設する過程の写真をを見せてもらったことだった。私は、1 つの学校を建設するためには予想以上に多くの人手が必要であることに驚くと同時に、学校を建設するためにシャン州の自治政府や現地コーディネーターとの強い繋がりが事前に築かれていたことにも驚いた。このように、支援活動には単に物資や資金を提供する以上の、強固な人間関係が欠かせないことを実感した。ボランティア活動においては、支援を行う側と受ける側との間に対等で信頼に基づいた関係が築かれていなければ、その活動は持続的な成果を生むことが難しい。さらに、先ほども述べたように、どの国からも多くを学べるという視点は、私にとって重要な気づきだった。支援を「している」のではなく、「させていただいている」という謙虚な姿勢で向き合うことが、本当の支援活動だと感じ、この考え方により、相手の文化や背景を尊重し、より良い支援が可能になると考えた。

このように、私は自身の設定した目標を達成することができたと同時に、それ以上に多くの貴重な経験をし、様々な視点から考えることができた。また、NPO インターンシップを通じて、予想以上に多岐にわたる活動に取り組むことができた自分に気づき、これまで気付かなかった自分の成長を実感することができた。その結果、活動への積極的な姿勢が身に付き、これまで以上に自分の能力に自信を持つことができた。そしてこの経験を通じて、Act for Child に対して提言をしたいと思う。活動を通して感じたのは、SNS 運用の強化が非常に重要であるということだ。個人的には、団体の SNS アカウントはより頻繁に更新する方が効果的だと感じた。活動内容や最新の取り組みをこまめにシェアすることで、支援者を始め、多くの人の継続的な関心を集め、支援の輪を広げるための強力なツールになると考える。

私はこの貴重な経験を通じて、今後取り組みたいことが 2 つある。1 つ目は「インターンシップで学んだ正しい国際支援の視点を活かして、学部の授業に取り組むこと」だ。私はインターンシップを始める前から国際協力に関する授業を履修していたが、今回の経験を通じて、単に理論や概念を学ぶだけではなく、実際の支援活動の現場ではどのような視点や姿勢が求められるのかを深く理解することができた。特に、支援する側とされる側の関係性、現地の文化やニーズを尊重した支援の重要性、持続可能な取り組みの在り方など、現場の実態を踏まえた学びは、今後の授業の受け方にも大きな影響を与えていると感じている。そのため、来期も国際協力に関する授業を積極的に履修し、今回得た視点を活かしながら、より実践的な知識を深めたい。2 つ目は「NPO や NGO に関わる就職先を探し、関連する企業や団体について詳しく調べること」だ。今回、Act for Child でのインターンシップを通じて、国際協力の現場を実際に経験し、NPO や NGO が果たす役割の大きさを実感し、それと同時に、自分自身もこの

・ 学生による活動報告（NPO インターンシップ・短期）

ような社会貢献活動に携わる仕事ができるのではないかと思うようになった。そのため、今後は NPO や NGO だけではなく、それらと協力関係を築く企業や団体についても調査し、自分に合ったキャリアの可能性を広げていきたいと考えている。

NPO 法人アークシップでのインターン

国際交流学科 2 年

<活動の内容ときっかけ>

昨年、同インターンシップに参加した際、アークシップにも興味を持ったため来年参加しようと思った。またアークシップの説明を聞いた際、「社会人と同じように責任ある仕事をやってもらう」という話を聞いて、自分を成長させられると思ったから。

当初の目的は「長期インターンを通して自分を成長させる」「チームでの自分の役割を知る」の二つを掲げており、両者とも達成できた。一つ目の目的においては具体的に、自分の意見を形にして共有し、行動する力を身につけられたと感じる。支援金担当として、寄付・物販を通して自主イベントの支援金を集めるという活動をしていたのだが、自身 1 人での活動であった。そのためより作業量が多く負担も大きかった。しかしだからこそ、自分が動かなければ何も生まれぬ状況であり、よく言えば自由な活動を行えるということだったので、行動力を身につけられた。今までの他のインターン活動などでは、意見を述べるのが苦手な性格も相まって、周囲からの話を聞いてから行動することが殆どであったので、成長できたと感じる。

文章作成の中で、大学と社会の違いを発見した。具体例として、作業の一つにあった Web 記事作成で団体理事の方から「初めての人にも読んでもらえる工夫が必要だ」と指摘していただいたことが印象に残っている。作成において、「自分は誰に何を伝えたいのか」「相手は何を知りたいのか」など対象と目的を意識して内容を考えていた。しかしその言葉を聞いた時、「内容以前に、表現方法や視覚情報にも注目しなければそもそも記事を開いてもらえない」と痛感した。今までの「学校」という環境下では、自身が書いたリアクションペーパーやレポートなどは「課題」として先生方に見てもらわなければいけないものであった。しかし仕事として何かを書くというのは、誰かに見てもらうためのものであり、まず読んでもらえるような工夫をしようと実感した。

アークシップでのインターンを通して、様々なバックグラウンドを持つ人たちとの繋がりを得た。NPO でのボランティアだからこそ、仕事・キャリア・趣味などまさに三者三様であり、話を聞くだけでも学びや気づきが多かった。また話すことで、コミュニケーションのコツも掴むことができた。「この人はこういうペースで話すのだな、この人と話す時はこういうことに気をつけよう」など、話し方の特徴を知ることによって、自身の聞き方・話し方の幅が少しでも広がったなと感じた。そしてインターン終了後でも、ありがたいことにそのような繋がりを持たせてもらっている。インターンの先輩方には大学の授業や就活について、社会人の方たちには仕事やキャリアについて、質問や対策をしていただけたことによって、広い視野でキャリアデザインを行うことができています。

今回のインターンを通して私は以下の3つを発見した。

<得意・不得意>

得意なこととしては、課題に対する分析や仮説、検証である。支援金担当として、寄付額の分析、課題に対する仮説と検証を行っていった。寄付を増やすために様々な観点(例:広報内容、SNS投稿のタイミング、媒体など)から仮説を考えていくことにやりがいを感じた。元々生活の中で疑問を見つけ、自分なりの意見を持つことは得意であったが、より物事を深く考える癖がついた。しかし、先述したように、それを共有したりすぐに行動に移したりすることは苦手である。今回その部分を改善できたので、得意なことにできるようにさらに磨いていきたい。

<価値観や行動パターン>

チームメンバーとの関わり方において、どのような価値観を自分は持っているのかを知った。インターン中で2人ほどが途中で辞めてしまうということがあり、チーム内で話し合いやフォローを重ねていた。私はその時、「人それぞれ問題があるから辞めてしまうことは仕方ない」と思うだけであり、仕事での関係性において自分は自分、人は人という考えを持っていることに気づいたのだ。しかし他メンバーは「どのような課題があって困っているのかを知って一緒に解決できないか」という意見を持っており、そのような広い視野をもつ努力をしようと感じた。

<自分の特徴や可能性>

自分の仕事での特徴は、最後までモチベーションを保ち続けることができることである。インターンの中で1番の課題は、初期、支援金が全く集まらなかったことである。2ヶ月間の期間を設定し、目標100万円を設定して活動した。しかし、1ヶ月半が過ぎても20万円ほどしか集まらず苦戦しており、メンバー全員も打開策が打ち出せないでいた。しかし、「結果などは気にせず、自分ができたいことをやりたいうにやる」ということを重視し活動した。結果、目標には届かなかった72万円を集めることが出来、達成感があった。また、どんな状況でも自分を成長させられる要素を見つけ、向上心を高く保てる強みがあると感じた。

今年はマーケティング班として活動を行い、自主イベントのコアファンを増やすという目的を立て取り組む。インターン中に培った様々な能力を伸ばし、課題として出てきた弱みを改善していけるよう引き続き取り組んでいく。また、このインターンを通して自分のロールモデルとなる先輩に出会えた。具体的な目標ができ、先輩のように仕事ができたりコミュニケーションを取ったりするにはどうすればいいか考えていきたい。

<参加した活動に対して>

もう少し、基礎的な部分から教えていただけると嬉しいです。実務経験が少ないまたはない中、知識不足のまま仕事をしてしまうと、その後繁忙期にスムーズに進まないなど支障が出ると感じます。またインターン生も分からないまま仕事をしなくてはならないので、その度に注意されモチベーションの維持が難しいと感じます。そのため初週などで、メールや資料作成の

・学生による活動報告（NPO インターンシップ・長期）

基礎的な知識や、共有・仕事上でのルールなどをまとめて教えていただける研修のような機会を儲けてもらえるとその後の作業がスムーズに行えると感じました。

自己評価は以下の点から記述する。

< 成果や行動の振り返り >

反省点としては、レスポンスが遅い時が度々あったことが挙げられる。メッセージの内容がすぐに答えることが難しいものだとはと回しにしまい、24 時間以内で返せていなかった。仕事においては、課題の結果だけでなく進捗状況を逐一連絡する必要があると気づき、まずは迅速に返答することを最も重視しようと思った。

また問題を周囲に相談せず抱えていたという点もある。「これを言いたいと言にくい、これは自分で考えなくてはいけない」など自己完結し、問題に正面から向き合えていなかった。まずは相談したいことをしっかりと伝えてから解決手段を考えるべきだと思った。

< 強み・弱み >

インターンを通して、自分の強みは共感力とタフさであると感じた。よく同期から相談を受けることが多く、聞き上手だと言ってもらえることがあった。また想いがこもった文章が書けると言っていたことが多かったので、相手の気持ちや言葉を受け入れられる共感力があると感じた。また先述したように、やり切る力があるので、そのタフさも大切にしていきたいと思う。

今回のインターンを通して、強みや弱み、チームにおける自分の価値観など自己に関する多くのことに気づくことが出来た。また、仕事のスキルや基礎的なルール、コミュニケーションスキルなど将来活きることも実践的に学ぶことが出来た。今後は、自分のキャリアについて考えを深め、それを実現していく中で（ゼミ活動、夏のインターン就活など）、それらの学びを活用していこうと思う。

ボランティア活動の内容ときっかけ

「千葉市こどものまち CBT」は、千葉市内で活動する子ども参加型の団体であり、毎年夏に開催される「こどものまち」というイベントを通じて、子どもたちが社会の仕組みや市民としての責任を学び、成長する機会を提供している。このイベントでは、子どもたちが「こども市長選挙」に立候補したり、お店の運営などの経済活動を体験したり、擬似社会の中で自分の役割を果たすことで、社会の仕組みを実践的に学べる。子どもたちは「まち」の運営に参加し、仕事や経済、政治を通じて、協力や自主性の大切さを学ぶことができる。

私は、小学生の頃から「コアスタッフ」としてこの「こどものまち」に参加しており、その経験がきっかけで、大学生になってからもボランティアスタッフとして参加を続けることを決めた。昨年度まではコアスタッフとしてまちの運営に携わり、経済やまち作りに貢献していたが、コアスタッフを卒業したため、またさらに深く関わりたいという思いから、今年度からは大学生ボランティアとして活動を始めた。大学生ボランティアとしての役割は、子どもたちと共に「こどものまち」を作り上げるサポートを行い、子どもたちが主体的に学び、成長するための手助けをすることだ。

大学生ボランティアとして活動を始めるきっかけとなったのは、小、中学生時代に接した大学生スタッフの存在である。先輩方は私が困ったときに親身になって接してくれ、どんな時でも支えてくれる存在だった。その姿に憧れ、私も子どもたちにとって頼れる存在になりたいという思いが芽生えた。この経験が、現在の活動の原動力となり、子どもたちが安心して学べる場を提供できるよう努力している。

当初の自分の目的を達成したか

ボランティア活動を始めた当初の目的は、子どもたちが「こどものまち」を通じて主体的に学び、楽しむことができるようにサポートすることだった。また、私がコアスタッフ時代に経験したような、子どもたちが普段の生活では得られないような貴重な体験をすることで、成長を促し、夏休みの思い出に残るような時間を提供したいと考えていた。そして、今まで支えてくれた大学生ボランティアの先輩方のように、私も子どもたちにとって頼れる存在となることを目指していた。

活動を通じて、私は当初の目的をある程度達成できたと感じている。準備段階では、最初は元気に走り回っていたりこどものまちで出会った友達とお話するのに夢中になっていたりしていた子どもたちが、短期間で「こどものまち」の運営に積極的に参加し、各自の役割を理解して行動するようになっていく姿を見て、子どもの成長を実感した。また、子どもたちが自分の意見を発信し、それに基づいて行動する場面で、私にアドバイスや困りごとを共有されたときには、頼れる存在としての役割を果たせたことを実感し、活動の意義を感じることができた。子どもたちが抱いた疑問や悩みを一緒に考え、解決策を見つける過程で、子どもたちが安心して活動できるような環境をつくることができた。

活動において新たに発見したこと

活動を通じて、子どもたちの成長速度と観察力の高さに驚くことが多かった。準備段階では、自分が何をすればよいのか分からずに不安そうにしていた子どもたちが、イベントの準備をするに従って自分の役割を理解し、積極的に関わっていく姿が印象的だった。特に、高学年の子どもたちは、短期間で自分の役割を深く理解し、周囲の動きや状況を観察しながら自発的に協力している様子が見られた。最初は消極的だった子どもが、次第に周囲を観察し、仲間の動きに合わせて協力し合う場面が増え、子どもたちの成長を感じることができた。

また、初めての体験であるにもかかわらず、子どもたちは自分の役割を積極的に受け入れ、工夫を凝らして任務を果たしていった。その姿勢から、子どもたちは実際の体験を通じて急速に成長し、自己の役割を認識していく力を持っていることを実感した。子どもたちが主体的に学び成長できる場を提供することの重要性を再認識させてくれた。また、子どもたちが直面する困難に対して、柔軟に対応し、解決策を教えるのではなく解決をするためのサポートする重要性も感じることができた。

自己についてどのような発見があったか

今回の活動を通じて、私は自分が子どもたちと関わる職業に就きたいという思いを再認識した。特に、子どもたちが困難に直面した際に寄り添い、一緒に解決策を考える過程で、自分の対応力や柔軟性が向上していることを実感した。また、子どもたちの主体性を引き出すためには、即座に答えを与えるのではなく、子どもたちが自分で考え、行動するきっかけを与えることが重要であることに気づいた。答えを教えてしまうと、毎回答えを教えてもらえとおもってしまい、自分で考えるという行為をやめてしまい、子どもたちの成長する機会を奪ってしまうということに気づいた。さらに、子どもたちが自分の意見を表現し、それを反映させることができる環境を作ることの大切さにも気づいた。自分の役割や意見が他者に受け入れられ、それが実際の活動に反映されることが、子どもたちの自信や成長を促すことに繋がると感じた。このような発見は、今後の活動にも大いに役立つと思う。

この体験をふまえ、今後何をしたいか

今回の活動を通じて、子どもたちが主体的に学び成長する姿を確認したことを踏まえ、今後はさらに主体性を引き出す仕組みづくりやサポート体制の充実を図りたいと考えている。具体的には、子どもたちが準備段階から意見を出し合い、役割分担や目標設定を行える環境を整え、子どもたちが自分の意見を自由に発信できるようにすることが重要である。これにより、子どもたちが自ら考え、行動する意欲を高めることができると確信している。

また、初めて参加する子どもや経験が浅い子どもたちに対しては、大学生スタッフがサポートする体制をさらに充実させ、年齢や経験に応じた適切な支援を提供する必要がある。子どもたちが安心して活動に参加できるよう、サポート体制を強化し、全員が自分の役割を全うできる環境を作ることが求められる。

そして、いつか私と同じように私の姿を見て、憧れをもって大学生スタッフまで続けてくれる、目標となるような人になりたい。

・ 学生による活動報告（ボランティア活動補助費）



チョコバナナ屋さん



集合写真



模擬選挙

第 70 回マレーシアワークキャンプ

英語英米文学科 4 年

ボランティア活動のきっかけ

卒業論文では「イギリスと日本における産業化と環境保護」をテーマに、産業革命期の環境問題と現代への示唆について研究した。イギリスの産業化による環境問題や、それに対するナショナルトラスト運動の発展、日本の高度経済成長期の公害問題への政府の対応などを比較する中で、市民意識や文化的背景が環境保全の在り方にどのような影響を与えるのかを考察をし、この研究を進めるうちに、環境問題への関心がさらに高まり、特に発展途上国における環境保全と持続可能な開発がどのように実践されているのかを実際に見てみたいと考えるようになった。そこで、持続可能な施設運営と孤児支援を行うNPO 法人CFFジャパンのボランティアプログラムに参加することを決意した。マレーシアの現場で、環境保全と地域の社会問題がどのように絡み合っているのかを理解し、現地の人々と交流しながら学びを深めることを目的とした。



自分の目的を達成したか

活動を通じて、施設の修繕や農業支援、子どもたちとの交流に携わり、孤児たちが安心して生活できる環境づくりに貢献することを目指した。また、無国籍集落の視察やピースセミナーを通じて、現地の社会課題への理解も深めることができた。しかし、こうした課題を根本的に解決するためには、現地政府や国際社会との長期的な協力が不可欠であり、短期間の活動だけでは限界があることも痛感した。

活動において発見したこと

CFFのプログラムでは、持続可能な施設運営の一環として、自給自足型農業の支援を行い、今回の活動ではパイナップル畑の作付けを行った。畑の整備から苗の植え付けまでを現地の人々と協力して進めることで、持続可能な農業の実践方法を学ぶことができた。さらに、森林農法を取り入れた敷地内で鶏の餌やりなどの飼育体験をすることで、環境負荷を抑えながら生産を維持する仕組みを実感した。また、無国籍集落の視察を通じて、経済的困難や社会的孤立に直面する人々の実情に触れたほか、パームプランテーションの問題についても学んだ。現地では、森林破壊が進む一方で、生活のためにパーム油産業に依存せざるを得ない状況があり、環境保全と経済発展のバランスを取る難しさを強く感じた。

この経験を通じて、「水資源の不足」「児童の栄養状態の改善」「環境保全と農業収益の両

・学生による活動報告（ボランティア活動補助費）

立」という3つの重要な課題を発見した。施設では湧き水や雨水を利用していたが、乾季には水不足が深刻になり、農業活動にも影響を及ぼしていた。また、孤児院に引き取られる前の子どもたちの多くが栄養不足の状態にあり、食材の不足や栄養知識の欠如が要因であると考えられた。さらに、パームプランテーションの地域では、環境への悪影響を抑えつつ、地元住民の収入源を多様化する取り組みの必要性を感じた。

この体験を通して感じたこと

持続可能な開発とは、単に環境を守るだけでなく、人々の生活を支える基盤を築くことでもあると実感した。農業、地域経済、児童支援といった異なる分野が密接に関わり合いながら課題解決を目指す姿勢は、日本の環境問題や社会課題に対する取り組みにも応用できるのではないかと考えた。また、現地の人々が直面する課題に対して、外部からの一時的な支援だけでなく、持続可能な形で解決策を模索することの重要性を学んだ。

自己の発見

現地ででの経験を通じて、私は「環境保全と社会課題の解決は切り離せない」という考えをより強く持つようになった。これまで環境問題を中心に学んできたが、実際にはそれだけではなく、経済的な視点や地域社会の事情を考慮しなければ、持続可能な解決策にはつながらないことを痛感した。また、異なる文化的背景を持つ人々と協力しながら課題解決に取り組むことで、多様な価値観を尊重することの大切さも学んだ。

この体験を通して今後何をしたいか

今回の経験を踏まえ、私は環境保全と社会課題の両面からアプローチできる研究を深めたいと考えている。特に、水資源の確保や児童の栄養改善、農業と環境のバランスについて学び、実際に現場で活かせる知識を身につけたい。また、将来的には、環境と経済の両立を図る持続可能なビジネスの可能性についても探究し、発展途上国の課題解決に貢献できる道を模索したい。

参加したボランティア活動に関して

CFF ジャパンのボランティアプログラムは、単なる支援活動ではなく、現地の人々と共に持続可能な仕組みを作り上げることが目的としている。私はこの活動を通じて、農業支援、児童福祉、地域経済の関係性を学び、現地の課題に対する理解を深めることができた。短期間の活動ではあったが、今後の学びやキャリア選択において大きな影響を与える貴重な経験となった。また、CFFの日本スタッフをはじめ現地スタッフも親切で、英語が苦手であった人に対しても積極的にコミュニケーションを取ったり、手助けをしていただき、海外ボランティアが初めてであった私にとって非常に心強かった。

自己評価

今回のボランティア活動を通じて、私は自ら課題を発見し、それに対して主体的に考え行動

・ 学生による活動報告（ボランティア活動補助費）

する力を養うことができた。活動前は、持続可能な開発や環境保全について学びたいという漠然とした目的を持っていたが、現地の実情を目の当たりにすることで、より具体的な課題意識を持つようになった。また、異なる文化背景を持つ人々と協力しながら作業を進める中で、柔軟なコミュニケーション力や、相手の立場を理解する姿勢の重要性を改めて認識した。一方で、自分の知識や経験の不足も痛感した。特に、水資源の確保や児童の栄養改善、農業経済の仕組みなど、現場で求められる専門的な知識が十分でないことを実感し、今後の学習課題として取り組むべき点が明確になった。また、語学力が足りていないことも課題であると感じた。今後さらに専門的な学びを深め、実践的なスキルを身につけていく必要があると考える。この経験を通じて得た学びを、今後の研究やキャリア選択に活かし、より実践的な形で社会貢献ができるよう努力していきたい。

・フェリス生のボランティアに関する意識調査

実施日：2024 年 11 月 11 日（月）～ 25 日（月）

対象者：全フェリス生

回答数：16 名

まとめ・概要

1) ボランティアの捉え方

学びや体験としてのボランティア

社会貢献としてのボランティア

行政や自治体の手が届かないところへ支援が届くボランティア

自分のスキルを活かしたい

興味のある分野が絞られている

2) この 1 年、学生生活で力を入れたこと

1 番目に力を入れたもの	授業	部活、アルバイト、海外留学
2 番目に力を入れたもの	部活	アルバイト、授業

ボランティアを 1 番目に選んだ人はいませんでした。2 番目に選んだ人は若干名。

力を入れたものは、「授業→部活→アルバイト」の順で多い。

3) 興味・関心の分野や実際に参加した分野

	1 位	2 位	3 位
参加していない人	自然・環境	子ども・青少年	まちづくり
実際に参加したもの	子ども・青少年 教育活動（同率）	自然・環境 子ども・青少年 障害児・者支援（同率）	国際協力 多文化共生 貧困者支援（同率）

4) ボランティア活動科目について

知っている人は 75%だが、関心ある人は 43.8%

5) 情報提供メールについて

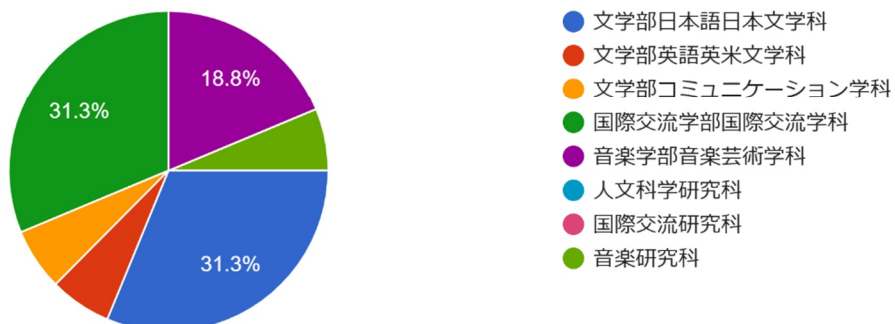
知らない人が 43.8%

．フェリス生のボランティアに関する意識調査

【属性】

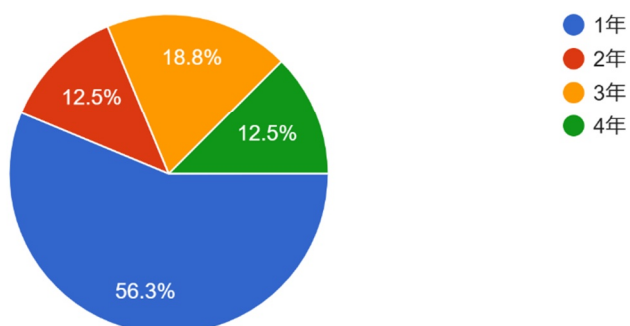
学科を教えてください。

16 件の回答



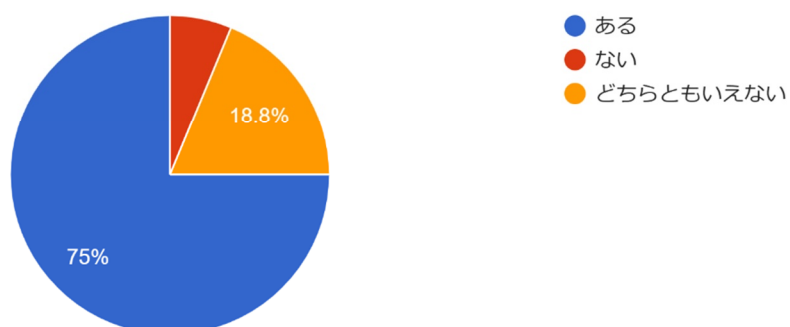
学年を教えてください。

16 件の回答



1. ボランティアに興味はありますか？

16 件の回答



・フェリス生のボランティアに関する意識調査

● どんなところに興味や、ボランティアをやってみたいという動機がありますか？

学びや体験としてのボランティア

- ・ 普段関われないような方々と接することができて良い経験になると思うから。
- ・ 一方的な献身ではなく、学びや意義価値のある活動だとやってみたいと思います。
- ・ 学生のうちにしかやるのが難しいと思うので色んなことをしてみたい

社会貢献としてのボランティア

- ・ 子供達や人々の役に立てるところ
- ・ 子ども関係や地域に還元できるようなボランティア

行政や自治体の手が届かないところへ支援が届くボランティア

・ 被災地など、今すぐにも支援が必要な場に対して、アプローチがしやすい性質に興味がある。政府や自治体からの支援も大切だが、細やかに草の根を張る為にはボランティアという形が欠かせないと思うので、やるとしたらそのような性格があるボランティアをしたい。

自分のスキルを活かしたい

- ・ 英語をツールとするボランティアをしてみたいです

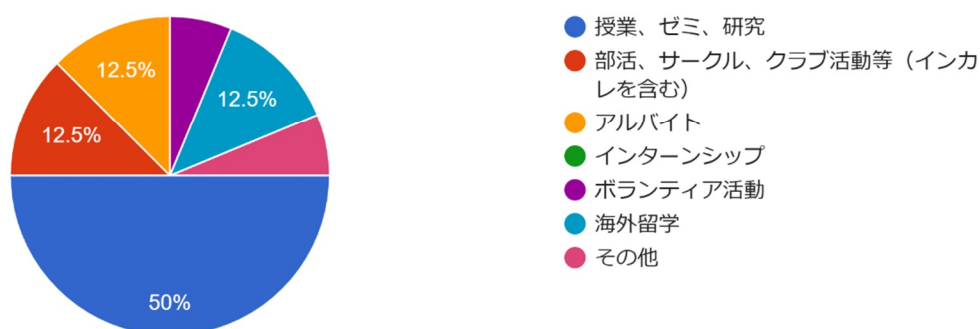
具体的な興味のある分野

- ・ 美化、下級生におしえる
- ・ 国際協力系のボランティア。特に発展途上国の支援に関われるような団体でボランティア経験をしてみたい。
- ・ 農業などの環境に対するボランティア

2 . 学生生活について教えてください。

大学生活においてこの1年でもっとも力を入れたことは何ですか？

16 件の回答



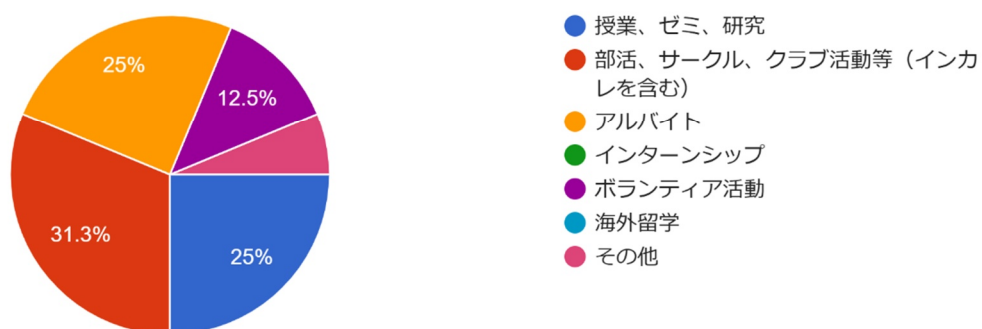
・フェリス生のボランティアに関する意識調査

その他の内訳

- ・ 自分時間の充実
- ・ 国際交流（留学生の LA やチューター）
- ・ 授業に力を入れました！
- ・ 語学研修において語学学習に意欲的だった。

この1年で 2 番目に力を入れたことは何ですか？

16 件の回答



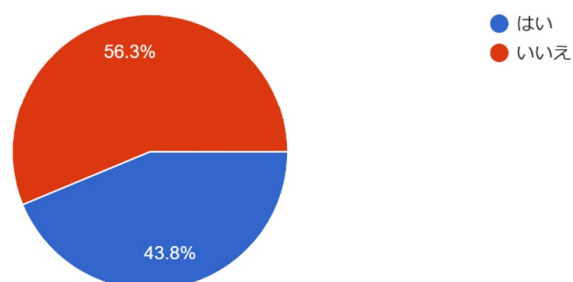
その他の内訳

- ・ 幼稚園や地域の施設などでの演奏活動
- ・ ボランティア活動に力を入れました！
- ・ 海外留学に向けて語学の授業に意欲的に取り組んだ。

3．実際の活動への参加について

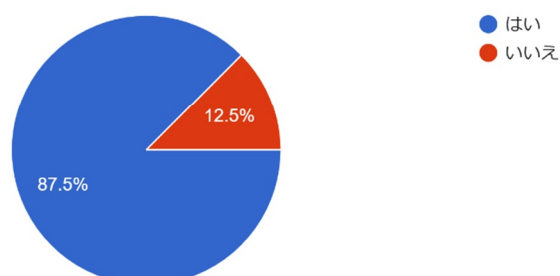
この1年でボランティアに参加したことはありますか？

16 件の回答



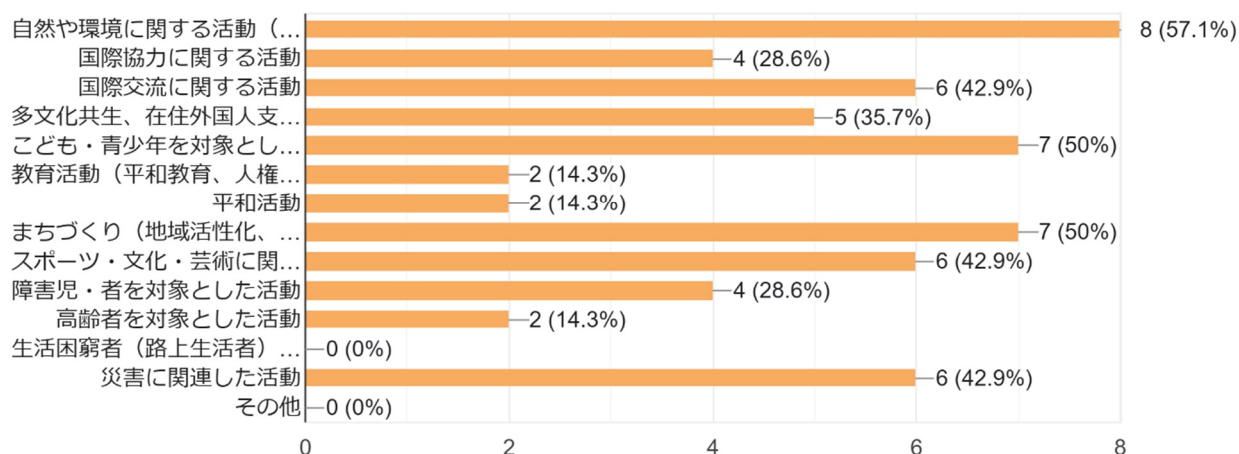
【参加していない人の意見】

いいえ、の方にお聞きます。今後、ボランティア活動に参加してみたいと思いますか？
16 件の回答



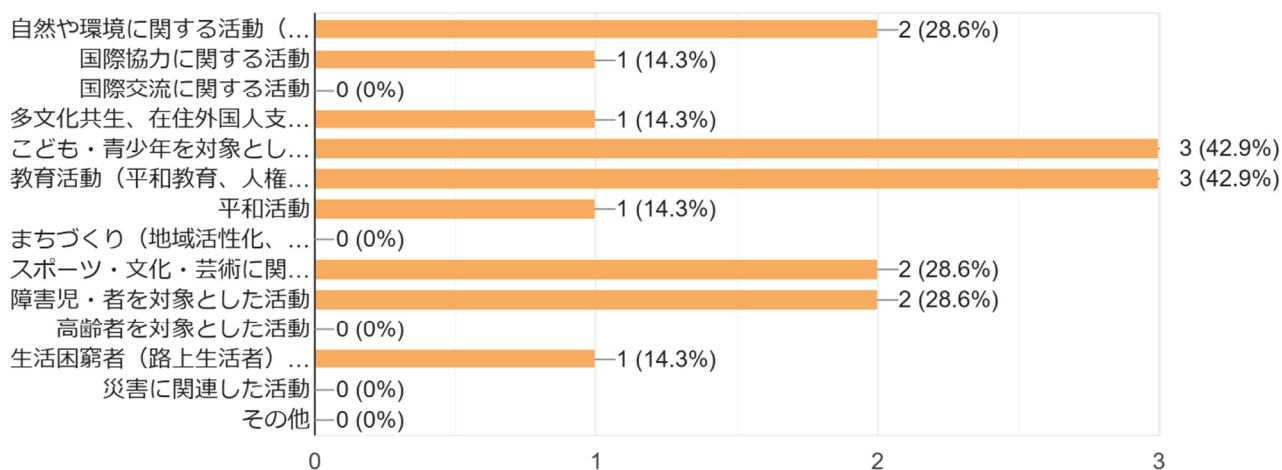
はい、とお答えになった方はどのような活動に参加してみたいですか？（複数回答可）

14 件の回答



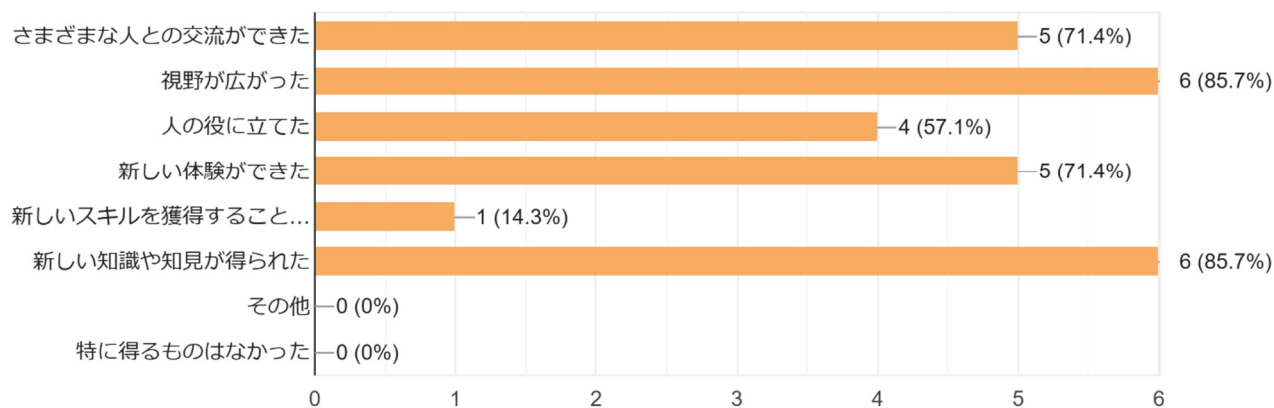
【参加した人の意見】

この1年でボランティア活動に参加した人へ ...参加した分野をお答えください。（複数回答可）
7件の回答



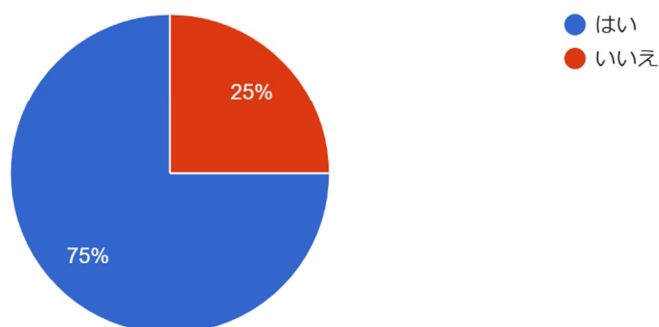
活動から得られたことは何ですか？（複数回答可）

7件の回答

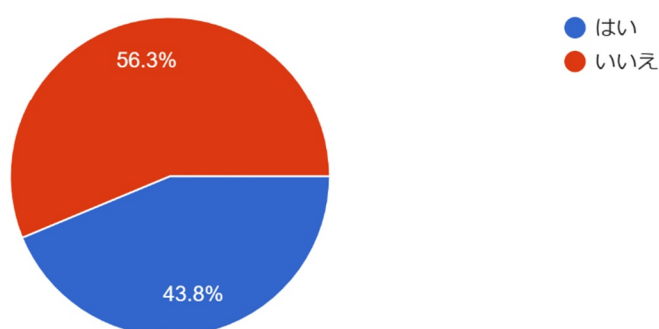


【ボランティア活動科目履修制度について】

フェリスの履修制度「ボランティア活動（短期）（中期）（長期）」科目を知っていますか？
16 件の回答



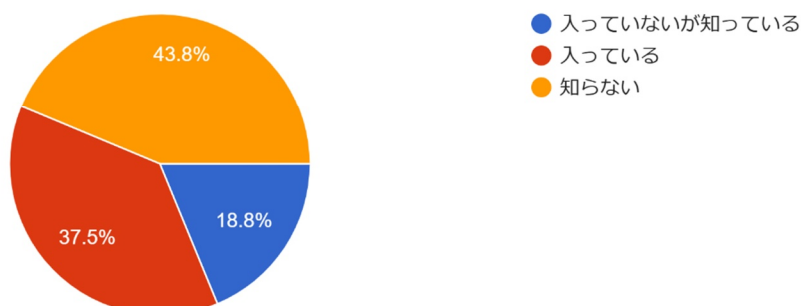
関心はありますか？
16 件の回答



8 名に資料を送付。

【ボランティア情報の入手方法について】

ボランティア情報提供メールを知っていますか？
16 件の回答



今回新たに登録希望者は 1 名。

・ボランティアセンター資料

○ボランティアセンター規程

2003年1月23日制定

2007年1月25日改正

2015年3月12日改正

2007年5月17日改正

2016年3月24日改正

（設置）

第1条 フェリス女学院大学学則（1965年4月1日制定）第42条の2の規定に基づき、フェリス女学院大学（以下「本学」という。）にボランティアセンター（以下「センター」という。）を置く。

（趣旨）

第2条 この規程は、センターの組織運営等に関し、必要な事項を定めるものとする。

（目的）

第3条 センターは、本学の教育理念である“For Others”の精神のもと、次に掲げるボランティア活動に係る諸事業の推進に当たることを目的とする。

(1) 学生のボランティア活動に係る情報の収集・提供、参加機会の紹介に関する事項

(2) 学生のボランティア活動事業の企画・立案に関する事項

(3) 学内のボランティア団体への支援に関する事項

(4) その他学生等のボランティア活動の支援・促進に必要な業務に関する事項

（センターの施設）

第4条 センターは、緑園キャンパスに置く。

（センターの構成）

第5条 センターには、センター長、ボランティアコーディネーター(以下「コーディネーター」という)、センター職員及び学生スタッフを置く。

（センター長）

第6条 センター長は、センターを代表し、その運営等を統括する。

2 センター長の任期は2年とし、再任を妨げない。

3 センター長は、第10条に規定する委員会及び大学評議会の議を経て、学長が任命する。

（コーディネーター）

第7条 コーディネーターは、センター長を補佐し、センター業務を行う。

2 コーディネーターは、事務嘱託1名とし、ボランティア活動に経験と見識を有する者をもって充てる。

3 コーディネーターは、第10条に規定する委員会及び大学評議会の議を経て、学長が任命する。

（センター職員）

第8条 センター職員は、センター長及びコーディネーターの指示のもと、センター業務を行う。

2 センターは、必要により臨時職員を、センター職員として置くことができる。

（学生スタッフ）

第9条 センターは、センター業務の運営に当たり、学生の参加と協力を求めることができる。

・ボランティアセンター資料

- 2 学生スタッフは若干名とし、公募に応募した本学学生の中からセンター長が委嘱する。
- 3 学生スタッフの活動期間は原則1年とし、再任を妨げない。

(委員会)

第10条 センターの運営に関する諸事項を審議するため、ボランティアセンター運営委員会(以下「委員会」という。)を置く。

- 2 委員会に関する事項は、別に定める。

(その他の事項)

第11条 この規程に定めるもののほか、センターの運営に関し必要な事項は、別に定める。

(庶務)

第12条 センターに関わる事務は、コーディネーター及びセンター職員が行う。

(規程の改廃)

第13条 この規程の改廃は、委員会の議を経て、大学評議会の承認を得て行うものとする。

附 則

この規程は、2003年3月1日から施行する。

附 則

この規程は、2007年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、2007年5月17日から施行し、2007年4月1日から適用する。

附 則

- 1 この規程は、2015年4月1日から施行する。
- 2 改正前の第4条関係委員会に関する事項は、ボランティアセンター運営委員会規程で別に定める。

附 則

この規程は、2016年4月1日から施行する。

○ ボランティアセンター運営委員会規程

2015 年 3 月 11 日制定

2017 年 3 月 10 日改正

2024 年 12 月 2 日改正

(趣旨)

第 1 条 この規程は、ボランティアセンター規程（2003 年 1 月 23 日制定）第 10 条の規定に基づき、ボランティアセンター運営委員会（以下「委員会」という）の構成、運営等に関し、必要な事項を定めるものとする。

(委員会の構成)

第 2 条 委員会は、次に掲げる委員をもって構成する。

(1) ボランティアセンター長（以下「センター長」という。）

(2) グローバル教養学部から選出された教員 3 名

(3) 教務部長

(4) 学生部長

(5) 国際部長

(6) 宗教主事

(7) 大学事務部長

(8) その他委員会が必要と認めた者

2 委員の任期は、前項第 1 号及び第 3 号から第 7 条までに掲げる委員についてはその職に在任する期間、同項第 2 号に掲げる委員については 2 年、第 8 号に掲げる委員については 1 年とし、再任を妨げない。

(審議事項)

第 3 条 委員会は、ボランティアセンター（以下「センター」という。）の運営に関し、次に掲げる事項を審議するものとする。

(1) センターの運営方針に関する事項

(2) センターの事業計画及び管理運営に関する事項

(3) センターの日常業務の指針に関する事項

(4) その他学生等のボランティア活動の支援・促進に関する重要事項及び必要と認められる事項

(運営)

第 4 条 委員会に委員長を置き、センター長がこれに当たる。

2 委員会は、委員長が招集し、その議長となる。

3 委員会は、定例委員会及び臨時委員会とし、定例委員会は原則として毎年度 1 回開催するほか、臨時委員会は、必要あると認めたときに随時招集する。

4 委員会は、その構成員の過半数の出席をもって成立する。

(議決の方法)

・ ボランティアセンター資料

第5条 委員会の議決は出席者の過半数をもって決定し、可否同数のときは議長がこれを決する。

(記録)

第6条 委員会の議事については、議事録を作成し、センターがこれを保管する。

(報告)

第7条 委員長は、委員会の協議の結果を学長及び大学評議会に報告するものとする。

(その他の事項)

第8条 この規程に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が決定する。

(庶務)

第9条 委員会に関わる事務は、ボランティアコーディネーターが行う。

(規程の改廃)

第10条 この規程の改廃は、委員会の議を経て、大学評議会の承認を得て行うものとする。

附 則

この規程は、2015年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、2017年4月1日から施行する。

【運営方針 ～大学の理念とボランティアセンター～】

“For Others”の精神のもとで「自立した女性」を育成することは、フェリスの教育目標の一つです。しかしそのためには、授業を受けて試験やレポートでよい点をとるだけでは足りません。むしろ学生たちが、自分から社会に出て行って問題を発見し、その解決のための理念と計画を立て、他の人々と協力しながら行動してゆく能力を養う必要があります。ボランティアセンターは、こうした視点に立って、これまでは学生個人の自主性に委ねられてきたボランティア活動を、大学として積極的にサポートすることを目標としています。これと連動して、2003 年度から「ボランティア活動1, 2, 3」が単位化されました。

1．センターは、ボランティア活動を通して、学生と大学、社会（国内と国外）をつなぐ役割を目指します。

2．センターは、学生が希望する活動領域で、信頼できる活動場所を紹介できるよう、コーディネーターの指導のもとで情報の収集と調査を行います。さらにボランティアに関連する領域を扱う教員、地域の社会福祉協議会や他大学のボランティアセンターとの交流を積極的に進め、ネットワーク化を促進します。

3．センターは、センターを訪ねる学生たちの自主性を重視し、活動場所とのマッチングに配慮します。また大学と学生が、“For Others”の精神のもとで目的を共有する対等な人間であることを自覚し、学生たちと対話し、問合せや相談に対応します。またモニタリングを行うことで活動中の学生たちを支援し、活動状況を知ることと並んで、活動先で得られた貴重な経験の共有化に努めます。活動が終了した後は、学生自身による自己評価を促し、場合によっては成果を社会に還元するための活動を行います。

4．センターは、学生参画型の運営を目指します。とくに学生スタッフの募集と育成に努めます。学生の企画立案によるボランティア事業を支援するために、情報と場所を提供します。

5．センターは、学内のボランティア団体を支援します。各団体の目的と活動趣旨を理解し、ニーズを知るために話合いの場を設け、可能な支援について検討します。

6．センターは、写真展・講演会・ワークショップなどの催しと並んで、Newsletter の発行、ホームページの作成などによる広報活動を積極的に行います。

センターは、以上のような活動を通して、学生たちが、自分を含む人間や自然の「根源的な尊厳」に対する感性を養い、現代社会の抱える諸問題について「実践的な知性」を育み、そして社会における「市民参画型」の合意形成を促進するためのコミュニケーション能力を身につけてくれることを、場合によっては卒業後の進路につながってゆくことを、また大学が、社会的な貢献度と知名度を高めてゆくことを目指します。

（2003年4月確定）

2024 年度を振り返って

コーディネーター 上條直美

2024 年度は、授業もすっかりコロナ以前に戻り、オンラインも随分減った。ボランティアに関する大きな変化は、外部団体からのボランティアや講座・セミナー参加の募集が非常に増えたことである。一方で、ソーシャルディスタンスを経験したり課外活動に制限を受けた世代の学生たちにアンケートをとり、「自分の生活で大切にしているもの」に順位付けをしてもらったところ、1 位はダントツで授業、2 位はサークル、3 位はアルバイトという結果になった。予想通りではあるが、ボランティアや課外活動まで時間や労力が回って来るのは以前よりも減っているのではないかと思う。外部からの募集の増加と学生のボランティア活動への関心のギャップが大きかったのも 2024 年度の特徴であろう。

2024 年度は 2 つの目標をたてた。ひとつは学生に関することである。センターの運営を担い、他の学生に自身のボランティア体験を伝えていく、という従来の学生スタッフに関心が集まらなくなった中で、インターンシップや学習支援に参加した学生にもどんどんセンターに関わってもらうよう声かけを増やしていった。また、どんなに小さくても学生が関わる機会を増やすよう情報発信を整備し、ほぼ毎日 1 つの情報を定期的に情報メールの登録学生(約 250 名)へ届ける努力をした。2025 年度は、こうした学生の活動の見える化として、センターのオリジナルサイトの開設と充実をはかりたい。また、従来の学生スタッフ委嘱状を一旦やめ、1 年間に継続的にセンターに関わった学生に、センターから活動証明書を発行するという方法を継続するためにどう工夫をしたらよいか考えていきたい。

2 つめは、全国の大学ボランティアセンターの情報を得て、大学ボランティアセンターの役割や現状を把握し、改めてフェリスのボランティアセンターはどうあったらよいかを考えることである。関東地区大学ボランティアセンターネットワーク(東京ボランティア・市民活動センター(TVAC)主管)に参加し、コーディネーター同士の経験交流や情報交換をするとともに、TVAC の実施する全国の大学へのボランティア調査にも参加させていただき、全国的な動向を知る機会を得た。また、フェリスのボラセン設立時以来会員となっている日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)にも積極的にに関わり、セミナー運営委員などを通してボランティアにまつわる様々な課題を共有することができた。

2025 年度はこうした経験をフェリスのボランティアセンターに還元しつつ、学生に寄り添ったサポートとは何かを追求していきたい。

2024 年度 フェリス女学院大学 ボランティアセンター年間活動報告書

発 行 2025 年 9 月 1 日

発行・編集 フェリス女学院大学 ボランティアセンター

〒245 - 8650 横浜市泉区緑園 4-5-3 緑園キャンパス CLA 棟 2F

TEL:045-812-8462 FAX:045-812-8467 e-mail:volunt@ferris.ac.jp

<https://www.ferris.ac.jp/life/volunteer-center/news/>

本報告書の一部または全部を無断で複製、転載、販売することを禁じます。



フェリス女学院大学ボランティアセンター

